

# 岩本遺跡

—岩本遺跡群第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第342集

1993

福岡市教育委員会



1. 第2面水田造構全景（西から）



2. 第3面水田造構全景（西から）

# 岩本遺跡

—岩本遺跡群第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第342集



1993

福岡市教育委員会

## 序

九州北部、玄界灘に面する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残されています。この地は、海峡を隔てて大陸に近い地理的条件を生かし、古くから発展してきました。しかし、近年都市化の進行と共にそれらの保全にも影響が現われてきました。

福岡市教育委員会では、さまざまな開発によって失われていく文化財について事前に調査を行い、保存策に努めています。

本書は、九州郵政局早良南郵便局舎の建替にともなう埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査では、縄文時代後期から中世に及ぶ遺構や遺物が出土しました。特に弥生時代の2面の水田面は、この地域の歴史や文化を語る上で大きな手がかりとなるものと考えられます。

本書が文化財保護への認識と理解を深める一助となり、また、研究の一助として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に当たり数々の御協力を賜わった関係機関、各位に心から謝意を表する次第です。

平成5年1月

福岡市教育委員会  
教育長 井 口 雄 哉

## 例　　言

- 1、本書は早良南郵便局建設にともない、福岡市教育委員会が1990年10月1日から同年12月15日まで発掘調査を実施した岩本遺跡群第3次調査の報告である。
- 2、本書使用の遺構実測図は、吉留秀敏、黒田和生、英豪之、石本恭司、牟田裕二、城戸康利が作成した。
- 3、本書使用の遺物実測図は、吉留秀敏、井英明、甲斐田嘉子が作成した。
- 4、本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。
- 5、本書使用の図面の製図は吉留秀敏がおこなった。
- 6、本書使用の方位は磁北である。本地域における真北との偏差は6°21'である。
- 7、遺構の表記はSDは溝、SBは掘立柱建物を示す。
- 8、本書の執筆と編集は吉留秀敏がおこなった。
- 9、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 10、本書の作成にあたって、亀井明徳、田崎博之、宮内克己の三氏には数々の御教示を頂いた。記して感謝します。

|        |                        |        |                   |         |                   |
|--------|------------------------|--------|-------------------|---------|-------------------|
| 遺跡調査番号 | 9040                   |        | 遺跡略号              | I WM    |                   |
| 調査地地籍  | 西区大字東入部1443-9          |        | 分布地図番号            | 85-A-6  |                   |
| 開発面積   | 1,650m <sup>2</sup>    | 調査対象面積 | 734m <sup>2</sup> | 調査実施面積  | 734m <sup>2</sup> |
| 調査期間   | 1990(平成2)年10月1日～12月15日 |        | 事前審査番号            | 2-1-427 |                   |

## 本文目次

|     |                     |    |
|-----|---------------------|----|
| 第1章 | 調査に至る経緯             | 1  |
| 第2章 | 調査の経過と組織            | 1  |
| 第3章 | 遺跡の位置と地理的環境         | 2  |
| 第4章 | 岩本遺跡群における既調査        | 4  |
| 第5章 | 岩本遺跡群をとりまく歴史的環境     | 6  |
| 第6章 | 調査の記録               | 7  |
|     | 1、発掘調査の概要           | 7  |
|     | 2、地層                | 7  |
|     | 3、第1面               | 8  |
|     | 4、第2面               | 12 |
|     | 5、第3面               | 15 |
|     | 6、第4面               | 17 |
| 第7章 | まとめ                 | 31 |
|     | 1、岩本遺跡群の中世集落について    | 31 |
|     | 2、岩本遺跡の弥生時代水田について   | 31 |
|     | 1、概要                | 32 |
|     | 2、水田の形態と構造          | 33 |
|     | 3、早良平野南部の水田開発と地理的条件 | 34 |
|     | 3、岩本遺跡の縄文時代資料について   | 36 |
|     | 1、出土土器の編年的位置づけ      | 36 |
|     | 2、共伴石器について          | 38 |

## 挿図目次

|      |                          |    |
|------|--------------------------|----|
| 図1.  | 岩本遺跡群と周辺の道路 (1/100,000)  | 3  |
| 図2.  | 岩本遺跡群の調査地点 (1/4,000)     | 5  |
| 図3.  | 土層断面図 (1/80) レベルは32.000m | 8  |
| 図4.  | 調査区西壁土層断面 (北から)          | 8  |
| 図5.  | 第1面遺構図 (1/400)           | 9  |
| 図6.  | 第1面遺構状態 (西から)            | 9  |
| 図7.  | S D01~05検出状態 (西から)       | 10 |
| 図8.  | S D06検出状態 (西から)          | 10 |
| 図9.  | 第1面出土遺物 (1/3)            | 10 |
| 図10. | S B07実測図 (1/50)          | 11 |
| 図11. | S B07全景 (南東から)           | 11 |
| 図12. | 第2面遺構図 (1/200)           | 12 |

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| 図13. 第2面水田（北から）                     | 13 |
| 図14. 第2面水田（南から）                     | 13 |
| 図15. 第2・3面出土遺物（1/3）                 | 14 |
| 図16. 第3面遺構図（1/200）                  | 15 |
| 図17. 第3面全景（北から）                     | 16 |
| 図18. SD08b検出（西から）                   | 16 |
| 図19. SD08b検出（東から）                   | 16 |
| 図20. 第4面全景（南から）                     | 17 |
| 図21. 第4面遺物出土状態（1/200）               | 18 |
| 図22. 第4面遺物出土状態                      | 19 |
| 図23. 第4面出土土器(1)（1/3）                | 20 |
| 図24. 第4面出土土器(2)（1/3）                | 21 |
| 図25. 第4面出土土器(3)（1/3）                | 22 |
| 図26. 第4面出土土器(4)（1/3）                | 23 |
| 図27. 第4面出土土器(5)（1/3）                | 24 |
| 図28. 第4面出土土器(6)（1/3）                | 25 |
| 図29. 第4面出土石器(1)（1/1）                | 26 |
| 図30. 第4面出土石器(2)（1/1）                | 27 |
| 図31. 第4面出土石器(3)（1/2）                | 28 |
| 図32. 第4面出土石器(4)（1/3）                | 29 |
| 図33. 第4面出土石器(5)（1/3）                | 30 |
| 図34. 第4面出土遺物（1/3）                   | 30 |
| 図35. 中世遺構分布図（1/250）                 | 31 |
| 図36. 岩本遺跡第3次調査地点周辺水田面推定分布図（1/1,000） | 32 |
| 図37. 貞島川流域の弥生時代水田の推定と集落（1/8,000）    | 35 |

## 表 目 次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 表1. 岩本遺跡群第1次調査地点別概要        | 4  |
| 表2. 第2面水田面計測値              | 14 |
| 表3. 第3面水田面計測値              | 17 |
| 表4. 第4面出土土器構成              | 37 |
| 表5. 第4面出土剝片石器一覧            | 38 |
| 表6. 剥片・碎片の形態、打面調整分類表       | 38 |
| 表7. 早良平野を中心とした偏平打製石斧の石材分類表 | 41 |

## 第1章 調査に至る経過

福岡市早良区大字東入部一帯に広がる岩本遺跡群は、1978年の福岡市教育委員会による遺跡分布調査により発見され、周知されるところとなった。1986年から始まったこの地域の県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財の試掘、発掘調査により、この遺跡が縄文時代から中世に及ぶ各時期の遺構が遺存していることも判明した。

1990年6月4日に岩本遺跡群内の大字東入部字ノマ1443番9に、九州郵政局（以下「甲」とする）より早良南郵便局庁舎建設にともなう埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けて福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下「乙」とする）では同年6月20日に試掘調査を実施した。試掘調査は申請地にA～Cの3ヵ所のトレンチを設けて行い、申請地の北半分にのみ遺構と遺物の包蔵を認めた。この結果を受けて甲、乙両者は協議を重ね、建設にともない遺跡の保存は困難と判断し、発掘調査を実施することとなった。同年8月に甲、乙両者は発掘調査委託契約書を締結した。

## 第2章 調査の経過と組織

発掘調査は当初試掘調査の成果を受けて1990年10月1日～同年11月30日の予定で開始した。しかし、調査途中に試掘調査では未検出であった水田遺構と縄文時代包含層が確認された。このため、甲、乙両者は委託契約書第2条にもとづき別途協議を行い、調査期間を同年12月15日まで変更、延長することとした。

調査に際しては以下の体制を組織したが、相次ぐ緊急調査で十分なる体制がとれなかった。しかし、関係各位の多大な協力によりその進行が無事進められたことを明示しておきたい。

調査委託者：九州郵政局

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

教育長 井口雄哉

部長 川崎賢治（前）、花田亮一（現）

課長 柳田純孝（前）、折尾 学（現）

第1係長 飛高憲雄

調査庶務：中山昭則

試掘調査：瀧本正志、吉留秀敏

調査担当：吉留秀敏

調査・整理補助：石本恭司（福岡大学）、黒田和生、英 豪之、井 英明

調査作業：百武義隆、金子由利子、久保喜代子、坂田美佐子、柴田タツ子、柴田常人、土斐崎孝子、舎川春江、藤長幸子、堀ウメコ、松本藤子、松井フユ子、門司弘子

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、丸井節子、宮坂環、木村良子

調査協力：亀井明徳（専修大学教授）、田崎博之（愛媛大学助教授）、牟田裕二（佐賀市教育委員会）、城戸康利、山村信栄（太宰府市教育委員会）、宮内克己、高橋信武（大分県教育委員会）

なお、発掘調査遂行に当たって九州郵政局建築部、九州ニード株式会社の方々にはご協力を頂いた。また、県営入部圃場整備事業関係埋蔵文化財調査事務所の方々には調査についてご指導、ご助言を頂いた。記して感謝したい。

### 第3章 遺跡の位置と地理的環境

岩本遺跡群は福岡市早良区大字東入部（旧早良郡入部村）に所在する。遺跡の立地する早良平野は、北部九州の脊梁をなす背振山塊に源を発する室見川が北流、開析し、玄界灘に向かって開いている。平野部は南北約8km、東西約5kmであり、おおよそ20km<sup>2</sup>の面積を有する。平野内には河口部を中心に第三紀、洪積世丘陵、台地が残るが、多くは未発達の扇状堆積が複合、形成され、さらにそれらを浸食し、あるいは覆って薄い沖積堆積物が認められる。

早良平野の中で岩本遺跡群の位置は南東端にあたり、油山山塊の荒平山（394.9m）の西側山麓部に近い冲積地内にある（図1）。現在、一帯が水田化しているために旧地形を知ることは困難であるが、区画整理以前の水田形状、比高差、水田土壤などに微地形の反映が認められた。調査期間中に実施した踏査とこれまでの発掘調査の成果を含めた周辺地形の復元は「まとめ」で示すので、参考とされたい。本遺跡の立地する微地形は、室見川の支流である貞島川の旧河道とそれにより略南北に分断された微高地からなっている。周辺の地形は南東に高く、北西に低い。本遺跡はこうした地形の中で大まかに2つの旧河道と3つの微高地から構成されている（図2）。これは本来は異なる別遺跡を複合している可能性もあるが、1978年次の分布調査においてはその識別が困難であったために遺跡の線引きの段階で包括したものである。本報告書では仮に先の微高地を西から“微高地1、2、3”と呼び、旧河道を西から“旧河道1、2”と呼ぶ。なお、微高地3は東側の山麓斜面に連続しており、地形面からみてもやや高く、厳密には他と区別すべきであるが、ここでは便宜上共通の名称で呼ぶ。

岩本遺跡群の総面積は約84,000m<sup>2</sup>であり、この範囲内での標高は34~29mを測る。



図1. 岩本遺跡群と周辺の遺跡 (1/100,000)

## 第4章 岩本遺跡群における既調査

### 第1次調査

1989年度に行われた入部地区圃場整備事業にともなう試掘調査と発掘調査である。調査は岩本遺跡群のほぼ全域に対して行われている。

発掘調査は12地点であり、総面積は8,582m<sup>2</sup>におよぶ。遺跡群のほぼ全域において、すべての微高地上、旧河道上を調査している。正式な報告書は未完であるが、概要報告が示されている。以下ではその概略を示す（表1、図2）。

| 地点名 | 調査面積(m <sup>2</sup> ) | 主 要 遺 構                      | 時 期                |
|-----|-----------------------|------------------------------|--------------------|
| 1   | 1,320                 | 井戸、溝、掘立柱建物、製鉄他               | 中世                 |
| 2   | 2,040                 | 土塙墓、溝、水田跡他                   | 古墳後期、中世            |
| 3   | 2,618                 | 竪穴式住居、掘立柱建物、溝、製鉄他            | 古墳前期、中世            |
| 4   | 3,904                 | 掘立柱建物、溝、井戸、火葬墓、製鉄他           | 中世                 |
| 5   | 450                   | 溝他                           | 中世                 |
| 6   | 72                    | 溝他                           | 中世                 |
| 7   | 280                   | 竪穴式住居、掘立柱建物、溝他               | 縄文晚期、古墳中期          |
| 8   | 800                   | —                            | —                  |
| 9   | 128                   | —                            | —                  |
| 12  | 1,980                 | 竪穴式住居、甕棺墓、木棺墓<br>土塙墓、溝他      | 弥生前期、中期<br>古墳前期、中世 |
| 13  | 1,229                 | 竪穴式住居、甕棺墓、土塙墓<br>掘立柱建物、溝他    | 弥生中期、古墳前期<br>中世    |
| 14  | 2,383                 | 竪穴式住居、方形周溝遺構<br>掘立柱建物、土塙墓、溝他 | 古墳中期、古代<br>中世      |

表1. 岩本遺跡群第1次調査地点別概要

このうち、1～3、5、12、13地点は微高地1上から旧河道内に位置し、14と3、8地点の北側は微高地2上に位置する。また、9地点は旧河道2内であり、6、7地点は微高地3上に位置する。

この成果から主に微高地上に集落、墳墓などの遺構が分布し、旧河道内には溝や水田遺構があることが判明した。詳細には微高地1では北側を中心に弥生時代前期から中期の集落、墳墓が展開し、その後古墳時代前期、後期にも小規模な集落や墳墓が形成される。さらにしばらくの断絶を経た後、微高地の南側を中心として中世に再び集落が形成される。この部分では特徴的に製鉄遺構が多く検出されている。微高地2では古墳前～中期の小規模集落が有り、その後古代から中世の集落、墳墓が形成される。微高地3では縄文時代晚期と弥生時代前期（？）の溝があり、遺構の性格は不明であるが、微高地上であり馬辺に集落が分布する可能性がある。

その後古墳時代中期の小規模集落が形成され、後に中世の集落が形成される。

このように見えてくるとまず、縄文時代晩期には微高地3に集落が形成され、その後弥生時代前期には微高地3と1に集落が形成され、同中期には微高地1に集落や墳墓が集中展開している。同後期には不明であるが、古墳時代前～中期には3つの微高地上にそれぞれ小規模ながら集落が形成される。同後期には微高地1にのみ小集落と墳墓が認められた。古代から中世にかけてはどの微高地上にも集落が形成されるが、その消長は不明である。なお各調査地点からはこの他に縄文時代後期から近世にいたる各種の遺物や遺構の出土も報じられているが、詳細は不明である。

## 第2次調査

1990年度に行われた入部地区圃場整備事業にともなう発掘調査である。発掘調査は第2次調査12地点の西側、岩本遺跡群の中の微高地1の北半部分に対して行われている。調査面積は2,421m<sup>2</sup>である。正式報告は未完であるが、概要が示されている。それによると弥生時代前期末から中期前葉、古墳時代前期、中世の3時期の集落が複合している。弥生時代では円形を主体とする竪穴式住居18、腰棺墓、土壙墓などがあり、古墳時代では竪穴式住居15が検出された。中世では掘立柱建物、井戸などがあり、一部を溝が囲んでいるという。各時期とともに集落の一部の調査であったが、遺構数、規模などが大きく、この地域では拠点的集落であったと見られる。



図2. 岩本遺跡群の調査地点 (1/4,000)

## 第5章 岩本遺跡群をとりまく歴史的環境

岩本遺跡群の周辺に所在する遺跡分布を概観し、本遺跡の調査、検討の一助としたい。周辺では同じ立地条件をもつ沖積微高地内の遺跡が最近次々と明らかになされている。縄文時代遺跡はなお少ないが、貞島川を挟んだ東入部遺跡、清末遺跡などで縄文時代後、晚期の遺構、遺物が検出されている。弥生時代遺跡は多く、隣接する重留遺跡や四箇船石遺跡、貞島川を挟んだ東入部遺跡などがある。これらは弥生時代前期から中期の集落跡と甕棺墓などの墳墓からなる。このうち東入部遺跡では弥生時代前期から中期の墳墓群と集落が検出された。その中で貞島川の西岸では方形の区画を有する甕棺墓群があり、多数の副葬品が出土した。弥生時代中期初頭から中期後葉に位置づけられ、早良平野南部の中心的集団墓地であったと考えられた。また、貞島川の東岸では弥生時代中期後葉の住居址群が検出されている。弥生時代後期は不明であるが、古墳時代前～中期には重留遺跡、岩本遺跡、清末遺跡、東入部遺跡などに集落や墳墓がある。この時期に古墳は重留遺跡群内に全長約75mの拝塚古墳があり、その西側に小規模の古墳群も築造されている。拝塚古墳は早良平野において最大規模墳である。古墳時代後期には集落と墳墓がやや離れ分布し、集落は重留遺跡、四箇船石遺跡にあり、墳墓は東側の荒平山山麓に群集墳が展開する。なお、近年の調査で東入部遺跡のある沖積微高地においても古墳時代中期以降、後期にいたる数基の古墳が分布していることが判明した。古代では南側の東入部遺跡で大型の掘立柱建物を持つ施設が検出されている。これは山麓斜面であり、一定の地山整形を伴っているとみられる。円面鏡や越州窯系青磁なども出土していることから、地方官衙を構成する1つの施設であろうと考えられる。中世には沖積微高地の各所に再び集落の形成が多数認められる。岩本遺跡、重留遺跡、清末遺跡、東入部遺跡などがあり、方形の区画溝を持つ居館跡も岩本遺跡、清末遺跡で検出されている。

このうち清末遺跡の居館跡は12世紀代の大型掘立柱建物群の遺営に始まり、14世紀代まで継続する周辺では最大規模の施設である。調査担当者は早良平野内にみられる条里状の水田区画溝の考古学的成果を踏まえて、この施設に中世初期に始まる周辺の新田開発の拠点としての性格を与えている。

以上のように岩本遺跡群のある地域は早良平野南部において、各時期を通じて中心的な役割を持つ遺跡が多い。遺跡の密集状態とも併せて、今後とも注意される地域であるといえる。

### 参考文献

井澤洋・1991「入部II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集

濱石哲也・長家伸・樋木義嗣1992「入部III」福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集

## 第6章 調査の記録

### 1、発掘調査の概要

調査対象地は国道263号線に添った水田地であり、調査時点は国道面から約1.1m低い土地であった。調査前の田面はほぼ平坦であり、標高は32.3~32.4mであった。

工事対象地は全体で1,650m<sup>2</sup>であった。事前に行った試掘調査の結果、遺構が北半部に検出されたことから対象地の北半部、734m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することになった。なお、南半部は排水渠置き場と調査事務所を利用した。

調査はまず最上部の水田耕土、床土を重機により除去し、以下を手作業にて掘り下げた。その結果、溝、柱穴などと中世の土器片、縄文時代に帰属するとみられる少量の石器が検出された(第1面)。第1面調査の過程で以下の地層堆積の観察と縄文時代遺物の所属層位の確認のために、調査区東西壁面に沿って二つのトレンチを設けた。両トレンチではほぼ同様の地層が認められた。それはトレンチの南北両側に基盤の礫層が現れ、中央部分は東西方向に旧河道があり、そこに砂層と腐植土層のレンズ状の堆積が認められた。この腐植土層は黒褐色を呈し、縄文時代晚期の遺物が多く出土した。このため第1面終了後、この縄文時代の調査を目的に掘り下げを実施した。ところが、その過程にこの腐植土上面において、それを被覆していた白色砂層に規則的な方形区画を検出した。精査の結果、これを水田面と認めた。土層観察を再度行った結果、10~30cmの間層を置いた上下2面の水田面を確認した。この水田面を上から第2面、第3面とし、さらにその下の縄文時代の包含層を第4面として各々調査を進めた。

### 2、地層(図3、4)

調査区の東西両壁面について土層観察を実施した。東から西へ下がる旧河道の谷地形に堆積した沖積世堆積物が主体であり、中央部分が深く、南北両側に薄い堆積があった。なお、谷部を挟んで北側は第3章で記した微高地3であり、南側は微高地2の一部と考えられる。

堆積層は5層群に区分される。第1層群(1~2層)は最上部層であり、現水田耕土、床土類である。微高地の上部を含め調査区全域に堆積し、層厚は20~60cmである。第2層群(3~4層)は谷部の上部埋土である。規模の大きい洪水砂とみられ、下半部は未風化のままである。上部は土壤化し、黒褐色を呈する。層厚は30~50cmである。本層群が第2面の水田を覆う。また、上面は第1面である。第3層群(5~6層)は第2面水田開削のために部分的に残り、水田畦畔部分や谷部の北側を中心に堆積している洪水砂であり、上部は一部土壤化している。層厚は20~30cmである。第3面の水田を覆う第4層群(7~8層)は谷部の下部埋土である。上部で細砂、下部の砂礫層へ漸移変化する。上部は土壤化が著しい。層厚は50cmを確認した。本層群上面は第3面の水田となり、層群上半部は縄文時代の遺物包含層であり、第4面と呼んだ。

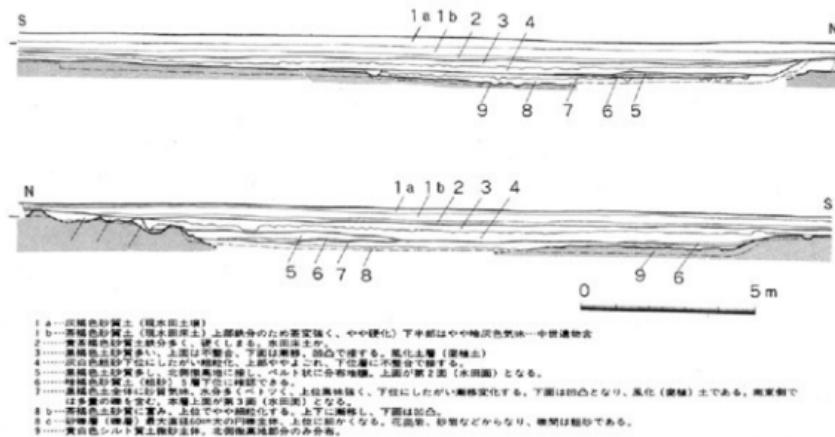


図3. 土層断面図 (1/80) レベルは32.000m

第5層群（9層）は谷部（旧河道）の両岸部分で確認した。何れも微高地の基盤層である。北側（第3微高地）は水成シルトであり、上部は風化土壤となる。南側（第2微高地）は砂礫層である。遺物などは認められなかった。

### 3、第1面（図5、6）

#### 1. 概要

第1面は標高32.1~31.6mである。調査区南側がやや低く、北側が高い。北側を中心に溝6条、掘立柱建物1、柱穴90余りを検出した。溝は全て東西方向にあり、北側の微高地3の斜面に沿って5条（SD01~05）、南側の微高地2に沿って1条（SD06）が検出された。掘立柱建物（SD07）は谷部北側で検出された。

#### 2. 途 槽

##### (1) 溝SD01：調査区北端で検出し



図4. 調査区西壁土層断面（北から）

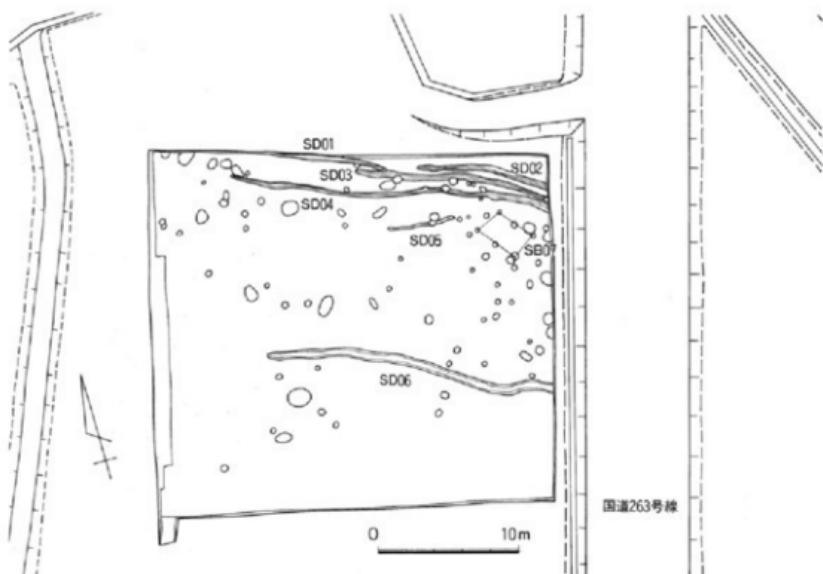


図5. 第1面遺構図 (1/400)

た。幅40cm、深さ5～8cmであり、断面はU字形を呈する。長さ約10mを確認した。溝内から少量の土器器片が出土した。

(2) 溝SD02：調査区北東端で検出した。規模、形態はSD01に類似する。長



図6. 第1面遺構状態 (西から)



図7. S D 01~05検出状態（西から）



図8. S D 06検出状態（西から）

さ9.5mを確認した。少量の土器片が出土した。

- (3) 溝S D 03: S D 01、02と平行して南側に検出した。幅20~30cm、深さ約10cmであり、断面はU字形~逆台形を呈する。長さ14mを確認した。
- (4) 溝S D 04: S D 03と平行し、その南側に検出した。幅30~50cm、深さ約10cmであり、断面はU字形を呈する。長さ23mを確認した。少量の土器片、石片が出土した。
- (5) 溝S D 05: S D 04と平行し約2m南側に検出した。幅20cm、深さ約10cmであり、長さ5mを確認した。遺物は出土していない。

#### (6) 溝S D

06: 調査区

中央に検出

した(図8)。

幅60~70cm、

深さ15~

20cmであり、

断面は逆台

形を呈する。

長さ21mを

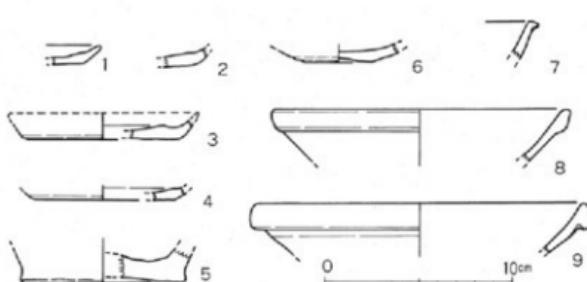


図9. 第1面出土遺物 (1/3)

確認した。土器片、石器、剝片が出土した。

(7) 捕立柱建物S

B07：北側の微高地3の斜面に検出した一間×二間の建物である(図10-11)。未調査部分への広がりや、規格と柱穴の構成に疑問も残るが、柱痕跡の遺存するものがあり、建物と把握した。北側でやや歪むが桁行315cm、梁行200cmであり、桁行の柱間は150~160cmである。磁北から約29度西偏する。遺存する柱痕跡は2つであり、何れも径約15cmをはかる。遺物の出土はない。

3. 出土遺物

第1面出土の遺物は少ない。遺構検出時と遺構内から少量の遺物を認めた(図9)。なお、遺物の中には弥生時代や縄文時代に帰属する土器片、石器類も含まれている。

第1面に関係する遺物には土師器皿、陶器、白磁皿、碗などがある。土師器皿(1~4)は

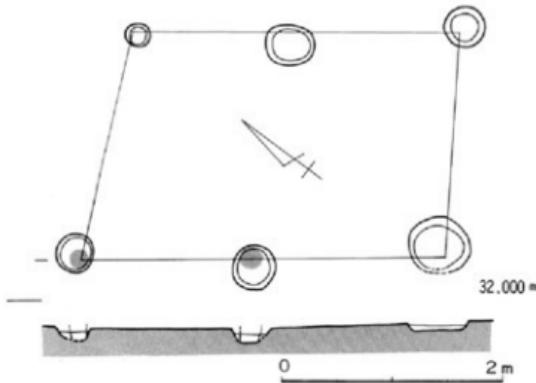


図10. S B07実測図 (1/50)

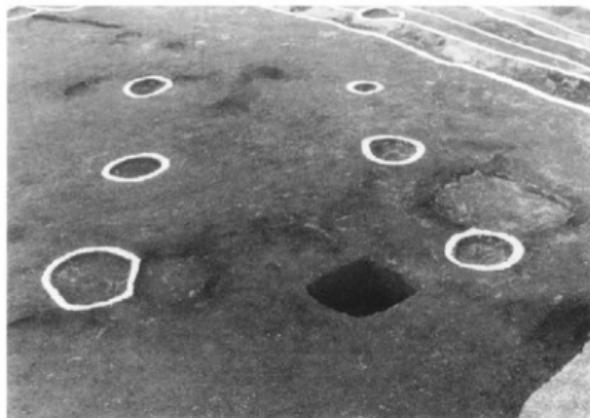


図11. S B07全景 (南東から)

何れも小破片であるが、復元すると底径8cm、口径10cm程度となる。1は溝SD01から出土。陶器(5)は褐釉壺の底部である。白磁皿(6)は底部破片であり、底径3.6cmを測る。白磁碗(7~9)は口縁端部を小さく外反せるもの(7)と、玉縁となるもの(8・9)がある。以上の遺物は白磁皿がやや古い特徴をもつが、他は12世紀後半から13世紀にかけての年代に位置づけられるものである。

#### 4、第2面

##### 1、概要 (図12~14)

第2面は標高31.8~31.4mである。この段階で調査区北側と南側の両隅の三カ所に微高地の基盤である第5層群が現れている。微高地の間に溝3条、水田遺構が検出された。水田は上面



図12. 第2面遺構図 (1/200)

を粗砂が覆い、比較的明瞭に検出された。粗砂には東から西への流れを示す流理が観察され、その堆積時に畦畔が破壊されている部分もあった。溝は微高地の斜面下方に等高線に沿って設けられている。北側の微高地3に沿って1条(S D08a)、南側の微高地2に沿って2条(S D09、10)を検出した。この南北の溝に挟まれて畦畔、水田面が展開している。

## 2. 造 構

(1) 溝 S D08a：微高地3の下方、標高31.7m付近に設けられている。水田面と同じ粗砂に覆われていた。幅40~50cm、深さ約10cmであり、断面はU字形を呈する。23mを確認した。溝に並行する田面の北東端に接して水口や、水溜状遺構がある。水溜状遺構は溝の一部か幅約100cm、長さ約200cm、深さ約50cmの範囲

で拡大している。埋土からは少量の土器片、剥片などが出土している。

(2) 溝 S D09：調査区南側に現れた微高地2の斜面側、標高31.7~31.8m付近に設けられた。微高地に沿って、南側を中心とする弧状に巡っている。幅約40~70cm、深さ約10cmであり、断面はU字形を呈する。長さを14m検出した。溝の底面は基盤の砂礫層である。埋土から少量の土器片を出土した。

(3) 溝 S D10：溝 S D09の途中から分岐し、微高地2の下方、谷部との境を流れる。標高31.7~31.5m付近に設けられている幅20~30cm、深さ約5cmであり、断面はU字形を呈する。長さ11mを検出した。溝の底面は砂礫層である。遺物の出土はない。

(4) 水田遺構：畦は削り出しにより設けられ、高さは5cm以下の遺存である。谷地形に沿って直交方向に6~7mごとに幅30~100cmの畦を設け、さらに谷地形と並行してやばらつくが、



図13. 第2面水田（北から）



図14. 第2面水田（南から）

2~5m単位に20~70cmの畦で区切り、おおよそ長方形の水田区画を設けている。畦の上部や水田耕土はなく、床面での検出であった。足跡や鉄分、マンガンの沈着は認められない。水田面は部分的なものも含めると24面があるが、水田面総面積、上面での平均標高は表2に示した。水口は溝S D08に接して設けられ、北側の各田面の隅部に確認できたものがある。用水溝は溝S D07から直接隣接する水田に注がれ、さらに南側の田面へ順次田越しで送られると考えられる。また、谷部全体でみると中央の田面が最も低い。微高地2に接する田面は比高差からみて、水口は確認できなかったが、溝S D09、10から引水していると見られた。したがって、南北両側の溝から注がれた用水は田越しで中央の低い田面S X02、06、10、14、18に送られ、さらに順次西側へ田越しで送られるものと見られた。なお、中央部田面の東西両端での比高差は約25cmである。

### 3. 出土遺物(図15)

第2面において出土した遺物は少ない。また、出土した遺物のほとんどは縄文時代後期の遺物である。こうした遺物には摩滅したものが多く、おそらく水田開削時から耕作時に下位の第4面から遊離したものと見られた。第2面にともなう遺物としては少量の弥生式土器片がある。甌の口縁部(2、3)が田面上で出土した。他に壺(1)、甌(4、5、7)が第1面などから出土しているが、これらも本来本水田面にともなうものと考えられる。1は鋤先口縁となる。2は口唇部を強くナデている。3は口唇部を水平に引き出しており、城ノ越式の特徴を持つ。5は甌の肩部破片であり、口縁下に三角凸帯を張り付け、以下は刷毛調

| 田面 | 面積(m <sup>2</sup> ) | 平均標高(m) | 田面 | 面積(m <sup>2</sup> ) | 平均標高(m) |
|----|---------------------|---------|----|---------------------|---------|
| 1  | 0.65以上              | —       | 13 | 6.5                 | 31.54   |
| 2  | 3.5以上               | 31.58   | 14 | 26.1                | 31.40   |
| 3  | 3.0以上               | 31.56   | 15 | 19.4                | 31.46   |
| 4  | 13.5以上              | 31.58   | 16 | 19.7                | 31.45   |
| 5  | 13.0                | 31.51   | 17 | 13.3                | 31.40   |
| 6  | 30.2                | 31.48   | 18 | 18.2                | 31.39   |
| 7  | 27.4                | 31.55   | 19 | 3.0以上               | —       |
| 8  | 22.1                | 31.58   | 20 | 1.6以上               | —       |
| 9  | 12.0                | 31.42   | 21 | 24.7                | 31.51   |
| 10 | 21.2                | 31.42   | 22 | 14.3以上              | 31.47   |
| 11 | 17.8                | 31.49   | 23 | 19.0                | 31.45   |
| 12 | 16.5                | 31.58   | 24 | 14.6以上              | 31.45   |

表2. 第2面水田面計測値

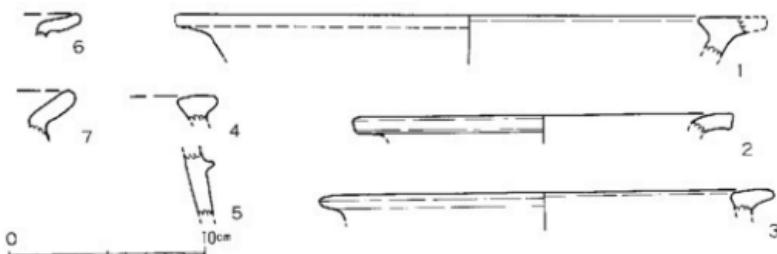


図15. 第2・3面出土遺物(1/3)

整である。7は口縁がくの字形に折れ、ややはね上げ状になる。何れも小破片であり、数量も少ないために時期の判断は困難であるが、弥生時代中期前葉～中葉のもの（1、3、4）と同中期後葉～後期初頭のもの（2、5、7）がある。第2面の時期は後者に近いものと考えられる。

### 5、第3面

#### 1、概要（図16）

第3面は標高31.6～31.3mである。第2面と同様の水田遺構である。調査区北側と南側の両隅の三ヵ所に微高地の基盤である第5層群が現れている。第2面の田面北側部分を中心に分布



図16. 第3面遺構図 (1/200)

していた第3層群を除去して検出した。第3層群の薄い南側では蛙部分のみの調査であったが、第3面の蛙と重複する部分が多く、比較的明瞭に第3面の田面を検出することができた。微高地の間に新たに溝1条、水田造構が検出された。溝は微高地3の斜面下方に等高線に沿って設けられており、第2面の溝 S D08 a の下部にはば重複して検出した (S D08 b)。

## 2. 造 構 (図18・19)

(1) 溝 S D08 b : 微高地3の斜面下方にあり、等高線に沿って設けられている。標高は31.6～31.7mである。幅50～100cm、深さ約15cmであり、断面はU字形を呈する。21mを確認した。溝に沿った微高地側に斜面を削った地山整形があり、調査区西端まで延びている。溝に並行する田面の北東端に接して水口や、水溜状造構が



図17. 第3面全景 (北から)



図18. S D08 b 検出 (西から)



図19. S D08 b 検出 (東から)

ある。水溜状遺構は溝の一部が幅約150cm、長さ約270cm、深さ約50cmの範囲で拡大、掘削されている。溝内埋土からは少量の土器片、剥片などが出土している。

#### (2) 水田遺構：畦は第2面のものと重複する部分が多い。

同様に削り出しにより設けられ、高さは5cm以下の遺存である。平面形態は第2面と異なり、隅部がX字形となる。

したがって谷地形に沿った直交方向も、並行方向にもジグザクとなる。畦の幅は40~60cmのものが多い。水田の基本的な平面形態は隅を落としたおおよそ長方形である。水田面は部分的なものも含めると19面があるが、水田面箇々の面積、上面での平均標高は表3に示した。水口は田面の隅部に設けられているものが多い。ただし、北側の田面では溝SD08bに接して設けられている。田面には足跡、水田耕土などは遺存しない。また床面は砂質が強く、南側では

砂疊層となり、鉄分、マンガンの沈着は認められない。なお、第2面とは異なり田面の標高は微高地3に接する北側の田面列が最も低い。したがって、用水は溝SD08bから直接この水田に注がれるものと、さらに南側から順次田越しで送られるものがあり、最終的にこの水田列に集まり、さらに順次西側へ田越しで送られるものと見られた。なお、北側田面の東西両端での比高差は約20cmである。

#### 3. 出土遺物（図15）

第3面にともなう遺物は極めて少ない。覆土や遺構内から出土した遺物はほとんど縄文時代のものである。6は水田面にやや食い込んで出土したものである。甕の口縁部小破片である。く字形に折れ、口唇部を僅かにね上げる。弥生中期末葉~後期初頭に位置付けられるものである。

#### 6. 第4面

##### 1. 概要（図20~22）

第4層群の上部を中心で多数の遺物が出土した。遺物の分布図を作成したが、平面的な集中

| 田面 | 面積(m <sup>2</sup> ) | 平均標高(m) | 田面 | 面積(m <sup>2</sup> ) | 平均標高(m) |
|----|---------------------|---------|----|---------------------|---------|
| 1  | 0.55以上              | —       | 11 | 25.6                | 31.35   |
| 2  | 3.5以上               | 31.52   | 12 | 19.4                | 31.42   |
| 3  | 3.0以上               | —       | 13 | 32.1                | 31.30   |
| 4  | (34.5)              | 31.37   | 14 | 22.7                | 31.37   |
| 5  | 28.4                | 31.43   | 15 | 5.6以上               | 31.28   |
| 6  | (27.4)              | —       | 16 | 24.7                | 31.42   |
| 7  | 37.3                | 31.32   | 17 | 14.3以上              | 31.39   |
| 8  | 21.2                | 31.39   | 18 | 19.0以上              | 31.38   |
| 9  | 17.8                | 31.46   | 19 | 14.6以上              | 31.39   |
| 10 | 20.4                | 31.34   |    |                     |         |

表3. 第3面水田面計測値



図20. 第4面全景（南から）

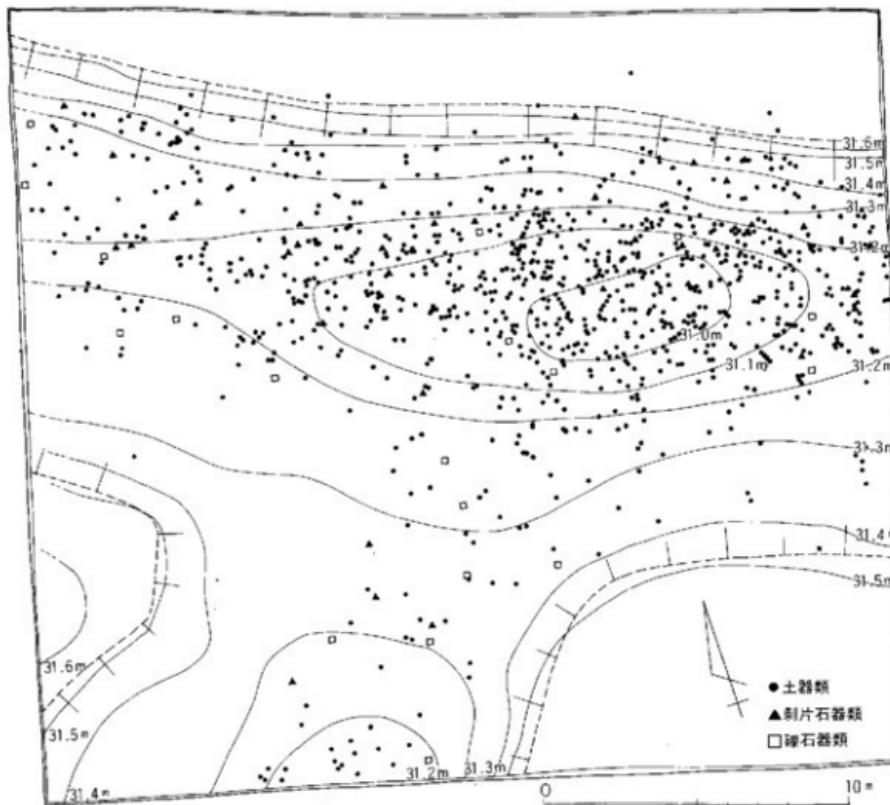


圖21. 第4面遺物出土狀態 (1/200)

や、分層などはできず、単純な遺物包含層を形成していた。したがって第4面は「面」として把握したものではない。ここでは便宜的に呼称したい。包含層は谷地形に沿って東西方向の主流部と、その中央から南に伸びる支流部からなり、平面的にはT字形を呈している。遺物のうち土器片類は主に主流部に多く、中でも微高地3に接する側に集中する傾向がある。また石斧類は支流側に比較的多く出土した。地形図では包含層調査後の地形を示した。標高は31.5~31.0mの範囲にあり、谷部中央が低い窪地状をなしている。

## 2. 出土遺物

第4面から出土した遺物には縄文時代の土器類と石器類がある。なお、第1面から第3面でも同時期の遺物が出土している。これは本来第4面にともなうものが水田や溝などの開削によって遊離し、二次的に包含されたものと考えられる。それらについては併せてここで報告したい。

### (1) 土器類（図23～28）

土器は全て破片であり、約500点ほど出土した。いずれも小破片が多く全体を復元できるものはない。ここでは個体識別できた口縁部と底部の破片を全て掲載するよう努めた。また、器形や器面調整の特徴のわかるものは胴部破片も示した。

以下では精製土器、粗製土器で大別し、さらに器種区分して報告する。なお、精製土器は器面を研磨してあるもので、それ以外は全て粗製土器とした。

精製土器は器面の内外を丁寧に研磨されたもので色調は黒色を呈している。器種は浅鉢、深鉢、高杯形などがある。浅鉢形と深鉢形の区分は口径に対して器高の低いものを浅鉢形、高いものを深鉢形とする。浅鉢形を6形式（A～F類）、深鉢形を1形式（A類）に分類した。

粗製土器はほとんど深鉢形と見られ、4形式（B～E類）に分類した。

浅鉢A類（1～4）：強く外反する頸部に直立～外反する幅広の口縁部がつく。口縁部と頸部にそれぞれ2条の凹線が施される。凹線は浅く、不明瞭である。口縁部や頸部に楕円形凹点（押点）がつく。口唇部は丸みをもち、外方へやや引き出す。

浅鉢B類（5、6）：短く強く外反する頸部に僅かに外反する短い口縁部がつく。口縁部と頸部に1条の凹線か沈線が施される。口縁内面にも凹線があり、口唇部はやや角張っている。

浅鉢C類（7、8）：く字形に強く縮まる頸部を特徴とする。小型の器種である。口縁部は強く外反し、口唇部はやや上方へ引き上げる。口唇端部は丸みをもつ。口縁部には凹線が一条施される。胴部には稜があり、丸みを持った底部へ続いている。

浅鉢D類（9～15）：頸部はやや縮まり、強く外反する口縁部に続く。口唇部は短く引き上げ、外間に凹線を一条施す。口唇端部は丸みを持つ。口唇端部に面取りがあり、小さく尖るものもある。

浅鉢E類（16～21）：全て小破片のために全体の器形が不明である。何れも口縁部は外反するもので、ポール状の器形を持つとみられる。口唇部の形状は次の3種類がある。まっすぐ立ち上がり、角ばり外面に凹線1条を施すもの（E 1類、16）。外反の度合いは小さく、口唇端部はやや角張る。内外間に凹線が1条施される（E 2類、17）。口唇部が小さく丸まり、上面と外面



図22. 第4面遺物出土状態

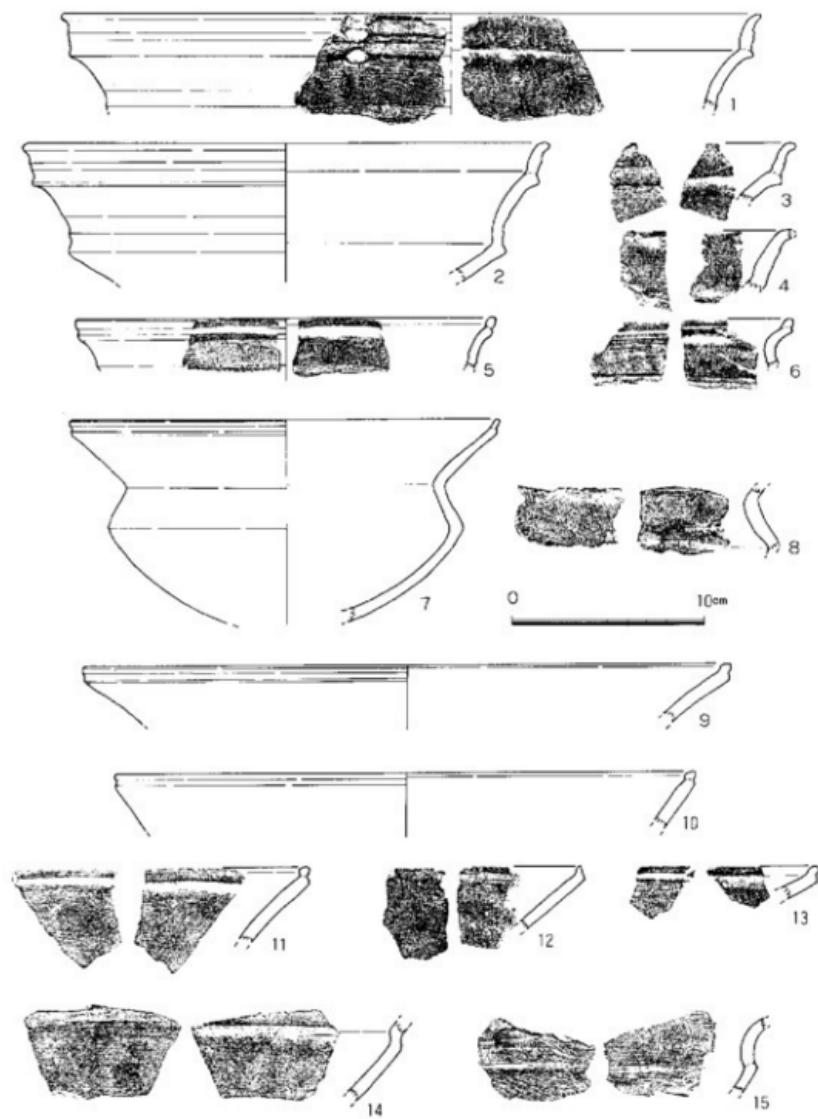


图23. 第4面出土土器(1) (1/3)

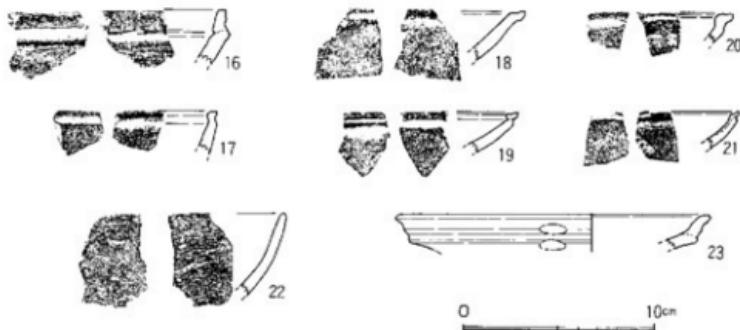


図24. 第4面出土土器(2) (1/3)

に凹線1条を施すもの(E3類、18~21)。

浅鉢F類(22)：小型の楕状の器形をもつとみられる。口唇部は丸まり、文様は施されない。

深鉢A類(24、25)：小破片のために全体の器形は不明である。胴部には稜線があり、緩く外湾する頸部に統くとみられる。胴部との境界に凹線か沈線が1条巡る。

深鉢B類(26、27)：緩く外反する頸部からまっすぐ立ち上がる口縁部に統くとみられる。胴部との境界付近と口縁部に2~3条の凹線が施される。器面には板状の工具で整形された後、丁寧にナデで仕上げられている。27は逆位置かもしれない。

深鉢C類(28~33)：B類と同様の器形であるが、凹線はない。28は口唇部に疑似繩文が連続押圧される。31~33は口唇部が丸まる。器面は板状工具で整形され、口縁部と内面を主にナデで仕上げられる。

深鉢D類(34~42、57)：口縁部が外反するものをまとめた。口唇部が丸まり、器面を丁寧にナデるもの(D1類、35~40)と口唇部が角張り、器面を丁寧にナデるもの(D2類、57)、口唇部を面取り、器面調整の荒いもの(D3類、41、42)がある。

深鉢E類(43~67)：口縁が直立気味のものをまとめた。器壁が薄く、器面を丁寧にナデ、小型の器形を見られるもの(E1類、43~48)。口唇部が丸まり、器面を丁寧にナデるもの(E2類、49~56)。器面調整の荒いもの(E3類、58~67)。

この他に深鉢の胴部破片(69~76)と底部破片(77~90)がある。器面を板状工具で整形するもの(70、71)やアナケラ条痕を施すもの(72~76)がある。底部はほとんどが平底か僅かな上げ底である。

高杯形(23)：破片のため全体は不明である。口径が小さいことと形態から高杯形と推定した。頸部は水平近く広がり、強く外反する口縁部に統く。口縁外面に凹線2条を施す。凹線上に2

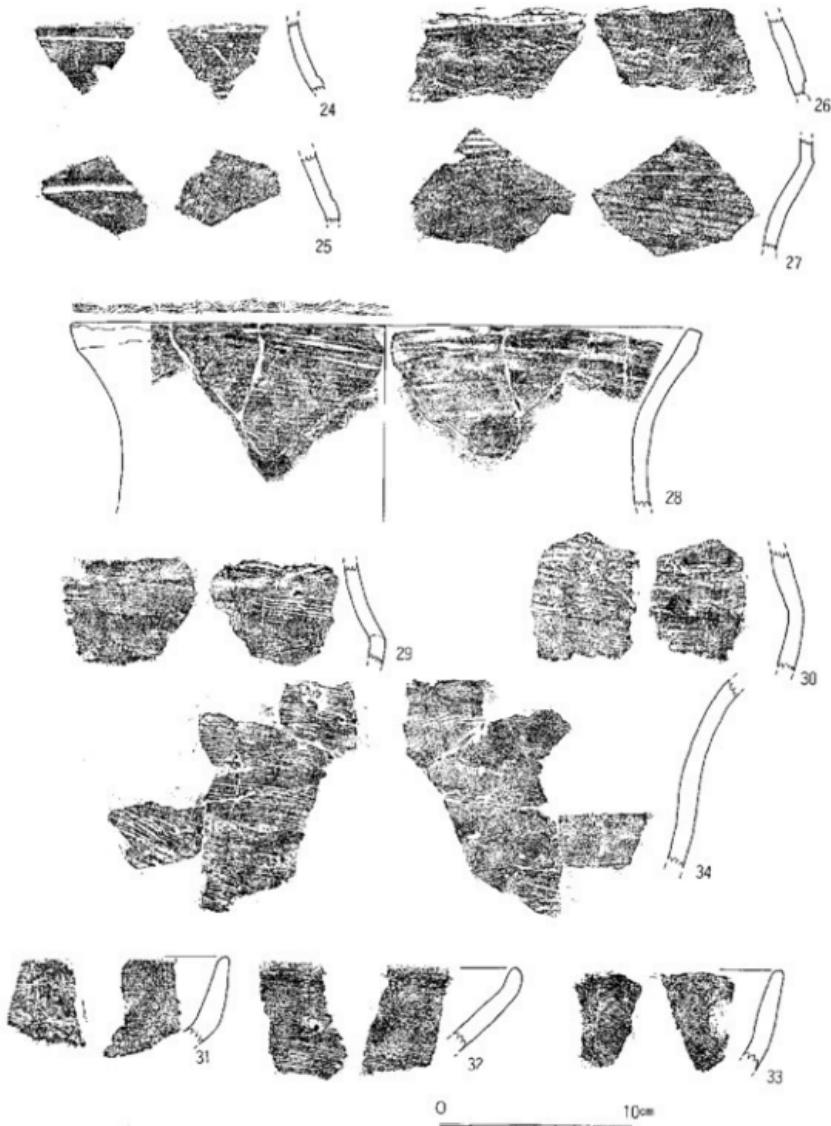


图25. 第4面出土土器(3) (1/3)

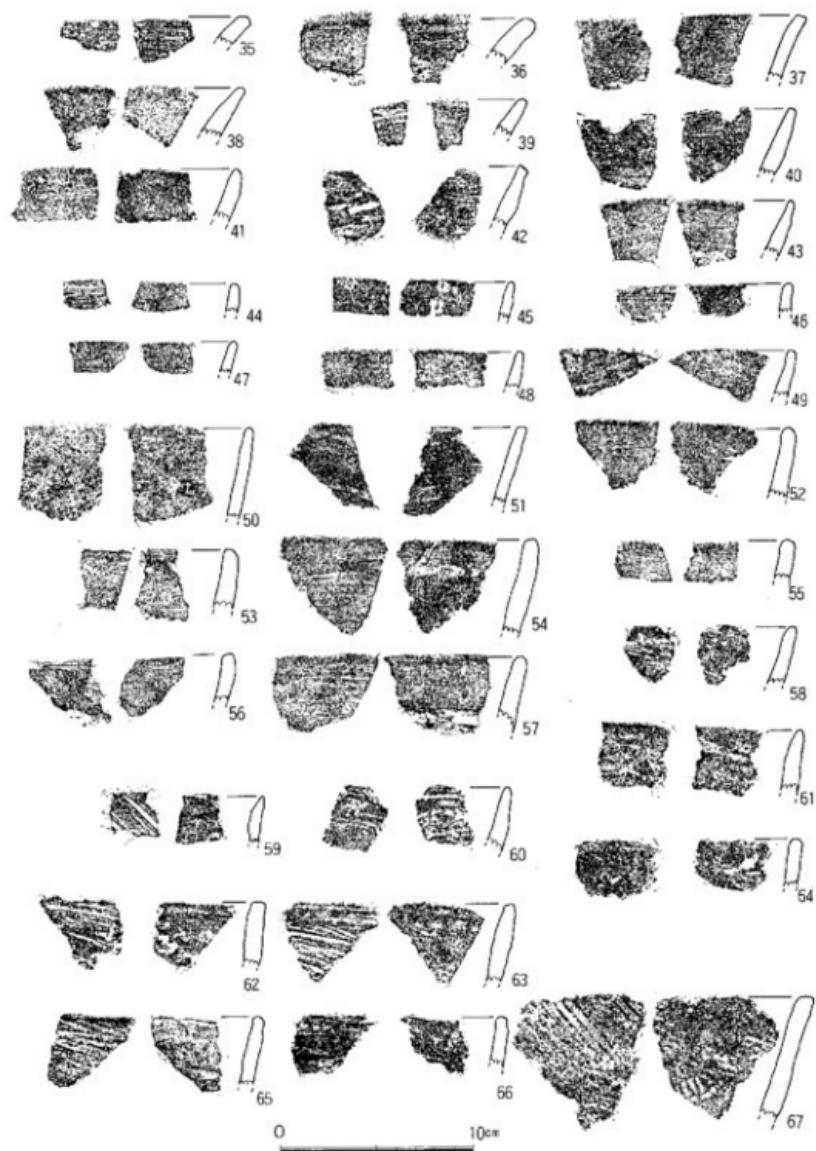


图26. 第4面出土土器(4) (1/1)

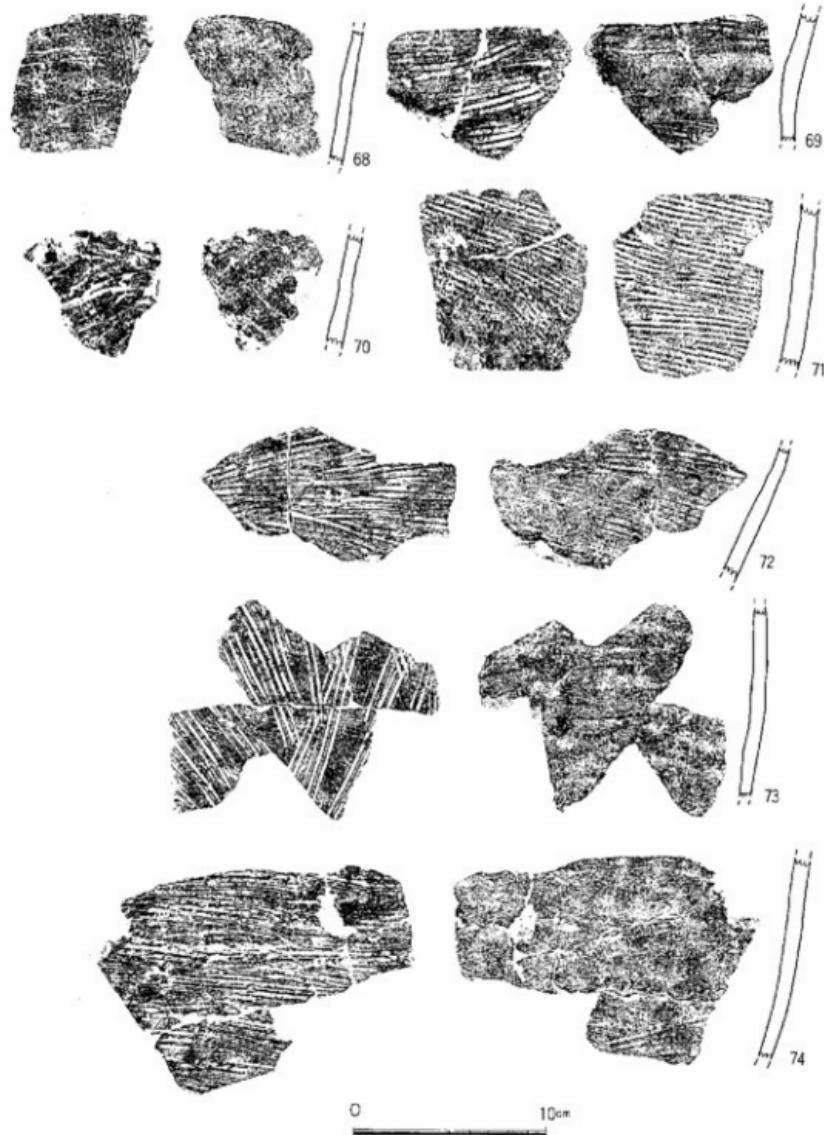


図27. 第4面出土土器(5) (1/3)

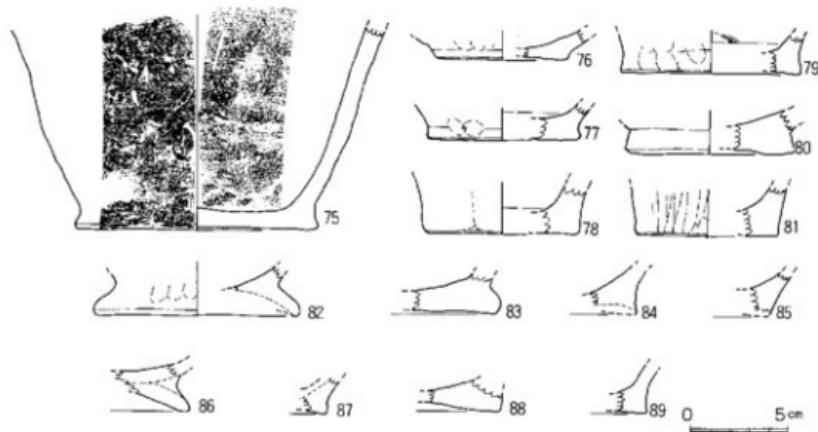


図28. 第4面出土土器(6) (1/3)

個の橢円形凹点（押点）がつく。

## (2) 石器類 (図29~33)

第4面を主に126点の石器類を検出した。そのうち定形石器は25点であり、他は石核2点、剝片41点、破片61点、原石1点である。石材でみると黒曜石104点、古銅輝石安山岩6点、玄武岩16点であった。このうち玄武岩製石器は打製石斧とその破片である。以下では黒曜石と古銅輝石安山岩の石器類を剥片石器類とし、またそれ以外の石器類を礫石器類として報告する。

### 1) 剥片石器類 (1~15)

剥片石器としては石鏃3点、尖頭器1点、削器1点、石錐1点、加工のある剥片3点、使用痕ある剥片3点、楔形石器1点の計13点がある。

a、石錐(1~3)：何れも黒曜石である。1は剥片錐であり、幅広の剥片を素材としている。長さ2.7cm、幅約2cmである。両側辺に鋸刃状の加工がある。2は脚破片である。3は未製品か。

b、尖頭器⑩：古銅輝石安山岩製である。背面には自然面があり、先端部を欠損する。現存長5.8cm、幅2.1cmである。

c、削器⑨：古銅輝石安山岩製である。横長剥片を使用し、簡単な整形を加えている。長さ4.7cm、幅10.4cmである。

d、石錐(7)：黒曜石製である。主要剥離面側を主に調整を加え、断面を凸レンズ状としている。錐部は欠損している。現存長2.3cmである。

e、加工ある剥片 (4~6)：黒曜石製であり、報告書によってはサイドブレイド、刃器など

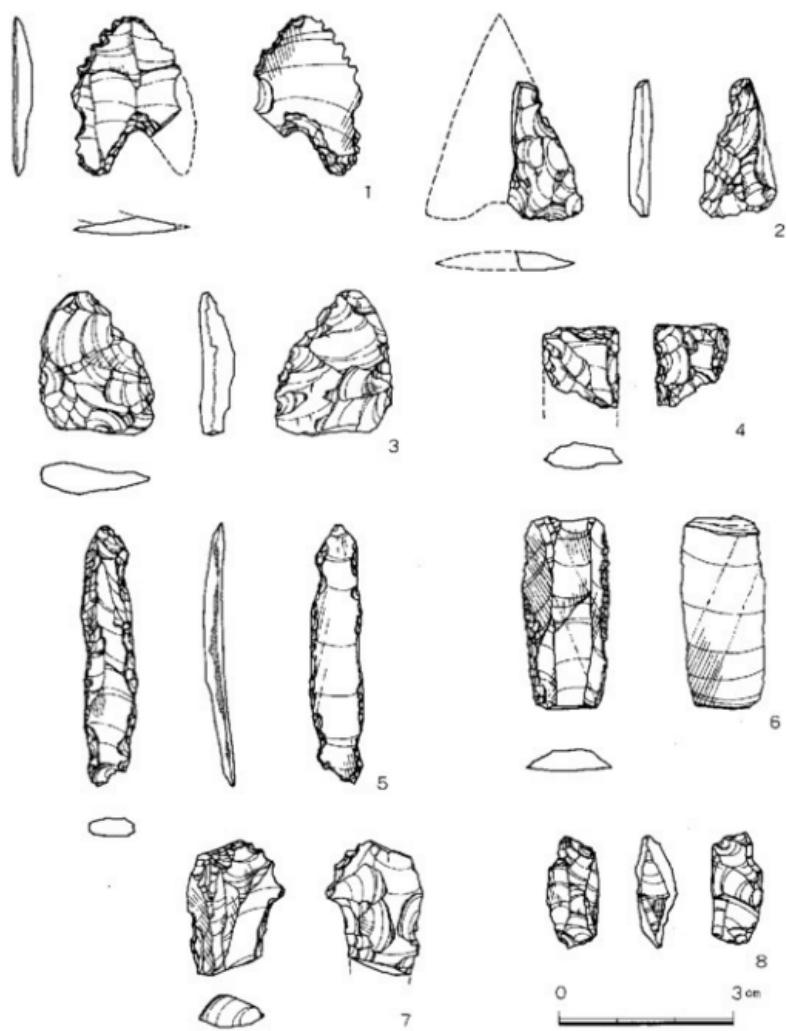


图29. 第4面出土石器(1) (1/1)

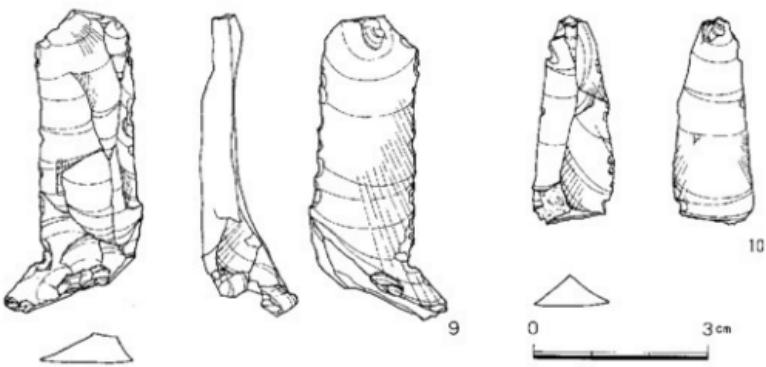
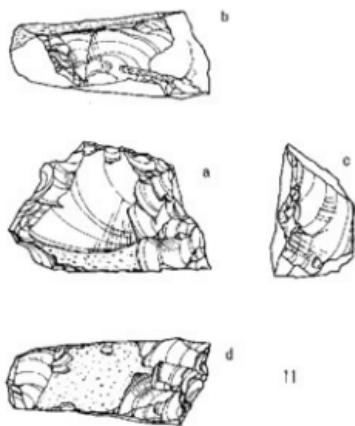


図30. 第4面出土石器(2) (1/1)



とされるものを含んでいる。4、5は縦長剥片を使用し、両側辺に入念な調整を施している。5は線状打面の剥片を使用し、両側辺に研磨痕がある。6は素材を大きく変形していない。

f、使用痕ある剥片（9、13、14）：黒曜石のもの（9）と、古銅輝石安山岩（13、14）のものがある。9は縦長剥片、13、14は不定形剥片であり、側辺に使用痕とみられる刃こぼれが観察される。

g、楔形石器（8）：黒曜石製である。長さ2cm、幅0.8cmの小型のものであり、両端から加撃が加えられている。両側は裁断面である。

h、剥片（10）：剥片は他に41点ほど出土している。最も形態の整っているものを図化した。黒曜石製である。背面に自然面を持ち、作業面に調整が認められる。剥離段階では単設打面である。

i、石核（11）：黒曜石の角礫を素材としたものである。素材は長さ約4cm、幅約2.5cm、厚さ約1.5cmである。剥片剥離初期の段階で放棄されたもので、自然面を多く残している。1回の打面転移があり、90°横位に振っている。最初の打面はb面であり、2～3回の調整剥離がみられる。作業面とは約60°の打角となる。この打面からは正面2～3回の剥離がみられるが、初回は不定形、その後は左側に移動して階段状剥離に終わっている。転移後の打面（c面）は1面の調整剥離

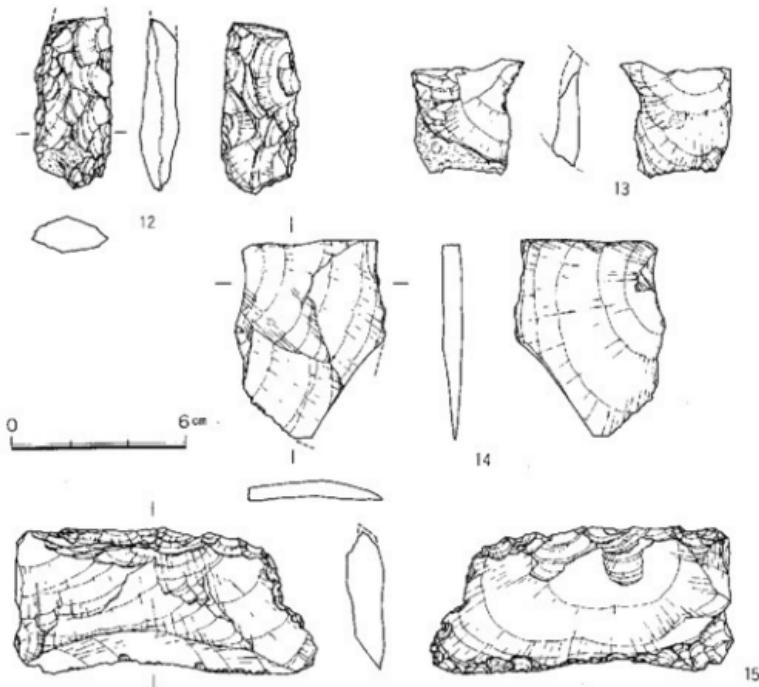


図31. 第4面出土石器(3) (1/2)

で設けられ、作業面とは70~80°の打角となっている。剥片剥離は作業面とb面に行われているが、何れも短い階段状剥離に終わり、剥片剥離を中断している。

## 2) 碓石器類 (16~27)

全て玄武岩製の打製石斧である。完形品は3点だけであり、他は基部、先端部の欠損品、もしくは破片である。素材は横長の剥片5点、縦長の剥片4点であるが、何れも不定形なものである。背面に自然面をもつものが2点ある。形態は短冊形、ばち形であり、側辺に浅い抉れをもつもの(20、21、24)もある。大きさは全て長さ10~13cm、幅5.5~8cmの範囲に含まれる。石斧は主に周辺からの荒い加撃により整形され、側辺はつぶれ、棱を失っているものが多い。また、先端部は磨滅し、剥離が不明瞭となっている。しかし、全体に風化が著しく、使用法などの観察は困難である。

## (3) その他の遺物 (図34)

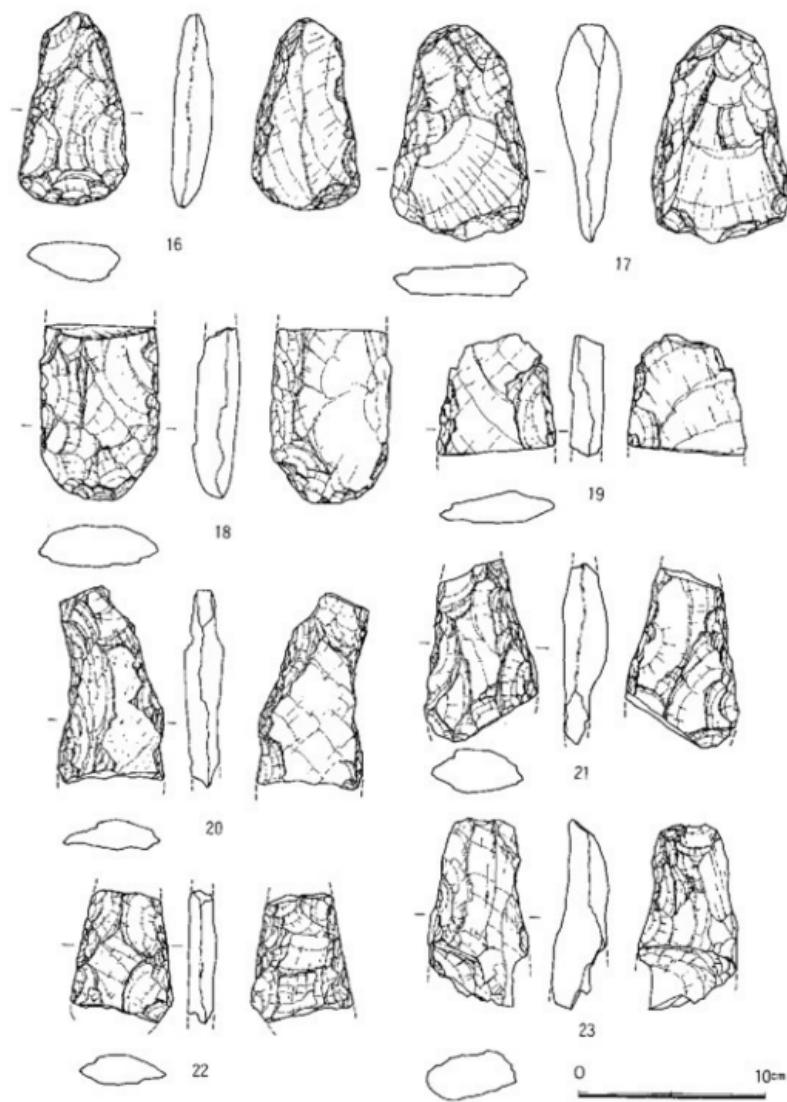


図32. 第4面出土石器(4) (1/3)

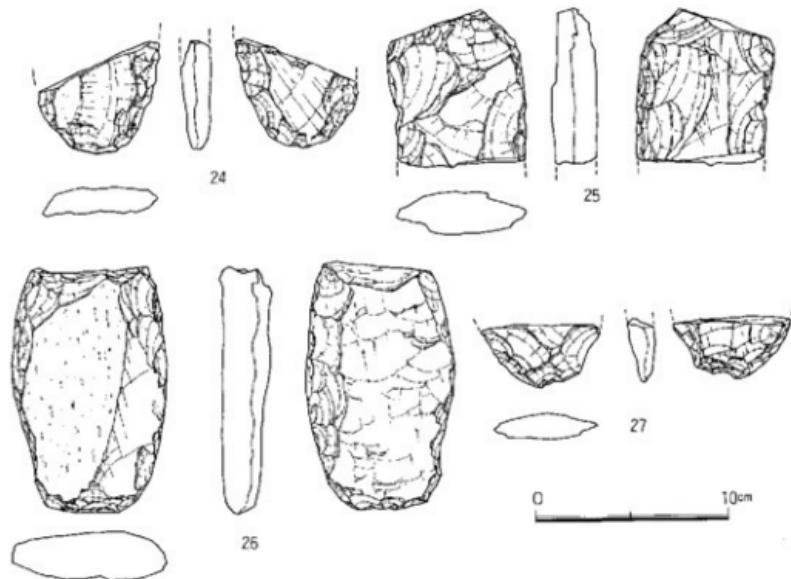


図33. 第4面出土石器(5) (1/3)

91は第4層群中から出土したものであり、縄文時代早期に位置づけられる押型文土器片である。胴部下半の部位である。楕円文で文様は比較的細かい。東～北側の微高地3からの流れ込みか。

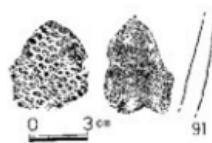


図34. 第4面出土遺物 (1/1)

## 第7章 まとめ

今回の岩本遺跡群第3次調査地点では、最終的に4面の遺構面を検出した。事前の試掘調査では最上(1)面のみ確認し、調査対象としていたために、下位の遺構面の確認にともない調査期間の延長をせざるを得なくなつた。しかし、各遺構面は浅い谷部に埋没した状態であったために保存状態は良く、この遺跡の性格を検討する上で、また各時代の研究資料として重要な成果を得ることができた。

その成果について、各遺構面ごとの概要を示し、報告のまとめとしたい。

### 1、岩本遺跡群の中世集落について

第1面において掘立柱建物、柱穴、溝などを検出した。溝は全て東西方向に掘削され、微高地端部に設けられたもの(S D01~05)と、谷部中央に掘削されたもの(S D06)がある。これらが全て同時期かは断定できず、遺構間の切り合いや埋土から前者は第1面遺構群に先行し、後者はより後出する可能性がある。出土遺物は少ないが土器類、陶磁器類があり、全て12~13世紀に比定されるものである。遺構は調査区の北側に多く分布している。本調査区北側に隣接する微高地3上を調査した岩本遺跡群第1次調査(以下略して「岩本1次」とする)第6地点では、幅2m、長さ38mの調査区が設けられている(図35)。この調査ではせまい範囲であるにも関わらず、溝状遺構6、柱穴5、土壙5などの検出があり、鎌倉時代に比定される土器と青磁が出土した。こうした点からこの北側微高地上に中世集落の中心があり、微高地の両側斜面から谷部である本調査区はその集落の南端であると考えられる。集落の性格や規模、消長については現時点では明らかにし難く、全て今後の課題である。

### 2、岩本遺跡の弥生時代水田について

第2、3面は何れも水田面であり、ここで

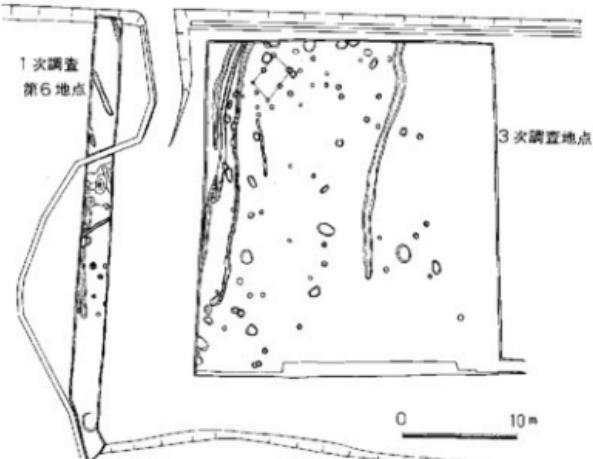


図35. 中世遺構分布図 (1/250)

は一括して扱う。

## 1. 概要

本遺跡では二面の水田遺構を検出した。その立地は沖積微高地間の細長い低地であり、東から西に下がる主流部と調査区中央から枝状に分かれ、南西に向かう支流部からなり、俯瞰では略T字形の水田域を形成している（図36）。

二面の水田の時期は出土遺物が少なく明確ではないが、二面は中間に洪水砂を介して畦畔の

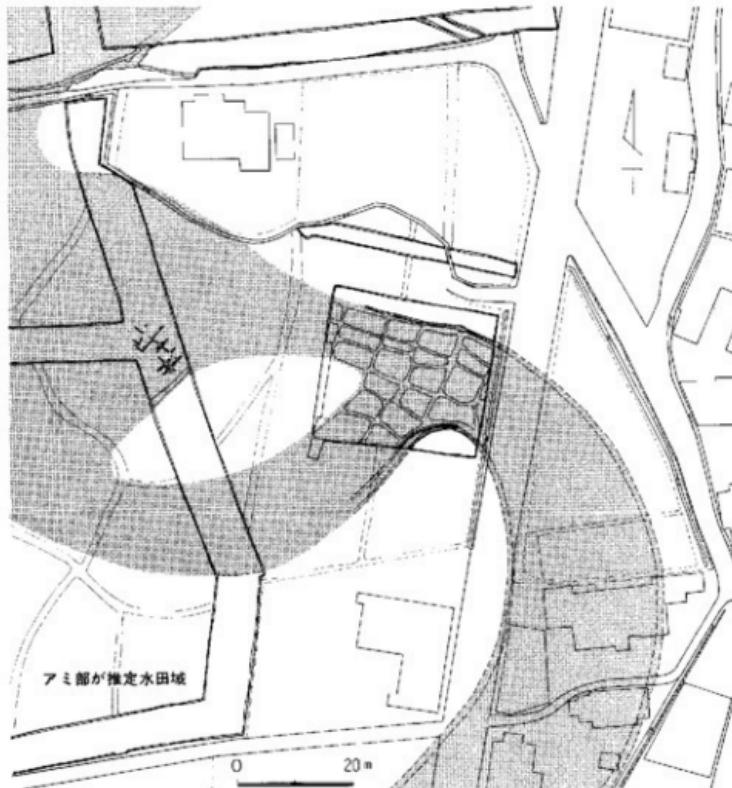


図36. 岩本遺跡第3次調査地点周辺の水田面推定分布図（1/1,000）

位置が重複し、水路や水口の位置が共通するものが多い。また、水田を覆う埋土中に弥生時代中期後半から後期初頭に比定される土器片が認められることから、両者の時期幅は少なく、連續した水田経営が予測される。第2面の最終的な埋没時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

なお、1989年に実施された「岩本1次」第2地点Ⅲ区第2面において水田面が確認されている。<sup>(註1)</sup>その水田面は幅約60mの埋没した谷地形の中に展開し、北東から南西に向かう水路（S D 20）とそれに並行もしくは直交する小さい溝状構造（S D 21～23）からなっている。報告では田面への砂の被覆は認められないとされている。その詳細や時期については触れられていない。この水田面は本調査地点の西側約20mの位置にある。田面の形態や地層の状態に相違があり、疑問を残すが2、3面の何れかに連續した水田面である可能性が高い。

## 2. 水田の形態と構造

岩本遺跡における水田の特徴は、貞島川の旧河道と見られる谷状地形に設けられた小区画の水田と用水路等の水利構造にある。

水田面の形態は二面ともに小区画水田であり、面積は第2面が5～30m<sup>2</sup>とばらつきが大きく、20m<sup>2</sup>以下のものを多く含むのに対して、第3面は20～30m<sup>2</sup>前後である。水田の形態は二面に差異があり、第2面は幹線となる畦畔と枝線になる小畦畔が直交もしくはT字形に接合する形態である。また、第3面は方形区画に1つあるいは2つの角を落とした変形六角形の田面を含んでいる。

水田の水利構造は二面とも共通して、旧河道の両岸に沿って水路が掘られ、水路沿いの水田には、1枚ごとに給水口が設けられている。排水は二面に差がある。第2面では両側からの用水は中央の最も低い水田に集められ、さらに田越しで下流へ送られる。第3面では、北側微高地に沿った水田が最も低くなるため、用水はこの水田列を田越しで下流へ送られることになる。

こうした二面の水田の形態と水利の変化は、洪水砂である第3層群を介して現れており、第3面水田が洪水砂に覆われた後の復旧の過程で生じたものと考えられる。特に水利の変化は第3面において、北側の最も低い水田部分に厚い洪水砂が堆積したためであり、それ以前の谷地形との変化に対応した処置であったと見られる。洪水砂は最も厚いところで約30cm遺存しており、再掘削による水田の復旧を困難にしたものと見られる。またこの洪水後の水田区画の変化は厚い洪水砂に覆われた北側部分のみ認められ、南側では以前の水田区画をほぼ踏襲している。つまり、厚く埋没しなかったところでは古い水田区画が残存し、他では復旧後の新しい区画が同時に存在したことになる。水田区画の変化は一層の小型化と畦畔の接合形態の変更である。小区画化はこの部分での傾斜が洪水以前と反対になり、田面で最大16～18cmの比高差が生じ、こうした斜面での保水のためにより小さい田面としたことによるとみられた。また洪水後、畦畔はより幅広く、かつ旧河道に対し直交方向に幹線を設ける形態へ変化している。これは周囲の水田へくまなく用水を送る形態から、給水口から用水を横方向へ流すことを重視した形態へ

の変化である。その理由は明らかではないが、洪水砂が荒い粗砂であり、著しく保水性が悪いために中央の水田への水まわりを良くする目的で改変されたものと考えられる。なお、田崎博之氏は全国の小区画水田を見る中で、この二面の水田について谷状の地形環境に基盤層が砂層、砂礫層といった保水性の悪い土壤環境が加わり、小区画でかつ谷の落ち際の水田に1枚ごとに水路からの水口が設けられた例であるとしている。<sup>(注2)</sup>

なお、小区画水田については既に多くの先駆的研究がある。小区画の形態は水田造成の際の地形の起伏に規定されているとみられている。工農普通や江浦洋氏の分類案によると本遺跡における第2面水田はB-1類、第3面水田はB-3類に相当する。江浦氏によるとB-1類は起伏少ない平坦な部分が多く、幹線畦畔に沿って直線的な配水を基本とするものであり、B-3類は微高地から平坦面へ移行する部分あるいは緩斜面においてみられる形態で、対角線方向への配水を意図したものと見ている。しかし、本遺跡においては第2面水田は傾斜のある部分に使用され、そうした理解とは異なっている。これは水田形態が地形の変化だけでなく、田崎氏も述べたように土壤の保水性なども関係して採用されていることを示している。

また、同一地点において洪水砂を介して異なる水田形態が設けられたことは注目すべきことである。これは同一集団によって地形、土壤、水利などのさまざまな状況に対応してより有効な水田形態を取っていたことを示している。

### 3、早良平野南部の水田開発と地理的条件

早良平野において弥生時代の水田遺構が確認されている遺跡は多くない。現在確認されているのは平野北部の数ヶ所の遺跡だけである。平野南部では用水路と見られる溝状の遺構や堰などが断片的に確認されているにすぎない。したがって、岩本遺跡において発見した水田遺構やその水利構造はこの地域の水田技術を考える上で重要である。ここでは今回の調査成果を踏まえて早良平野南部の水田開発についての予測を示したい。

早良平野南部は本遺跡の南側約1kmの位置にある平尾地区を起点とする未発達の扇状地を形成しており、扇状堆積物の砂礫層を浸食して扇頂部から旧河道が放射状に分布している。旧河道のほとんどは沖積地内に埋没しており、早良平野南東部の一般的な地理的環境をなしている。岩本遺跡の水田は貞島川のこうした旧河道である低地の1つに設けられたものである。貞島川はこうした河道の中で現在も河川活動を行っており、金屑川、稻塚川と共に早良平野の最大河川である室見川右岸の支流をなしている。近代に至り貞島川は室見川から用水を受けて平野南部の水田用水路として利用するために大幅な改修を受けている。そのために、改修以前の本来の水量、水深などは不明である。水位調整のために相当の掘削が行われたことは明らかである。もともと調査地点から東南一帯にあたる東入部地区は荒平山山麓でもあり、地下の湧水水準が浅く、湧水量も比較的多いという。著名な湧水「松ヶ根の井戸」も調査地点の南500mの位置にある。本来貞島川はこうした荒平山山麓と扇頂部付近の湧水を集めて北流していた小河川であつ

たと見られる。

第2、3面の水田経営では、水田への給水は旧河道の両側に設けられた水路を利用していった。水田の形態は保水性の懸念を示していたが、水路も微高地斜面の砂礫層、砂層に設けられており、同様に保水性は良くない。また、水路に沿った水田一枚ごとに水口を設けていることから、水路に送られる用水は相当の量を必要としたと考えられる。この水田が造られた旧河道は、造成以前は浅い谷地形を呈しており、縄文後期段階には流水の痕跡はなく、安定した腐植土の形成が認められた。こうした点からみて、この場所への水田造成にあたって、貞島川からの引水があったことはほぼ確実である。こうした用水の確保にあたっては当然堰や基幹水路等の設置が予測されるが、それらの規模や構造については今後の調査を待つほかはない。ただし、旧河道の地形と水路の水位水準からみて、調査地点の南側300~400m付近の貞島川に堰が設けられた可能性が高い(図37、★印)。したがって、こうした予測を前提とすればこの旧河道に設けられた水田の上限は、堰の推定位置より南側に延びることはない。



図37. 貞島川流域の弥生時代水田の推定と聚落 (1/8,000)

なお、1992年に調査された東入部遺跡第5・6次調査において弥生時代中期後半～後期前半の  
<sup>(註3)</sup>集落跡が検出された。この集落の場所は旧河道内の水田推定上限地点や、貞島川への堰を推定した地点に隣接する東側斜面上であり、この旧河道での水田開発と何らかの関係が予測される。

早良平野南部におけるこれ以前の水田経営については不明であるが、概観してみよう。夜白式の段階にも断片的な資料はあるが、本格的な集落形成は弥生時代前期後半である。これは岩本遺跡でも平野中央よりの微高地1の2次調査地点や、貞島川西岸の東入部遺跡第2次調査地点などに検出されている。<sup>(註4)</sup>これらの集落は同中期前半まで継続していることから、この時期は旧河道でも引水が比較的容易な周辺の低地を水田として利用していたと見られる。本調査地点のような山麓寄りの水かかりの悪い土地は、この段階にはまだ開発は行われていなかったようである。大規模な地形改変を伴う水田開発は弥生時代中期後半に開始されたものと考えられる。

弥生時代中期後半になると、貞島川東岸の集落は岩本遺跡微高地1では途絶え、上流500mの東入部遺跡第4・5次調査地点と下流300mの四箇船石遺跡<sup>(註5)</sup>に新たに集落が形成される。新たな水田開発とこうした集落の動きが関連しているかは不明である。しかし、こうした大規模な開発と水利の変更が流域の集団関係の調整抜きで行われるとは考え難く、この時期に集落の分離、移動、生産地の拡大などを伴う何らかの動きがあったことを予測させる。

#### 〔註〕

(註1) 井澤洋一1991「入部Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集

(註2) 田崎博之1991「弥生水田を考える」「考古学ジャーナル」337号

(註3) 工衆普通1991「水田の考古学」東京大学出版会

江浦 洋1991「弥生時代水田の総合的理理解のための基礎作業1」「大蔵文化財研究」第2号(pp1-10)

(註4) 調査担当者の池田祐司、吉武学氏の教示によると、1992年の発掘調査によって、貞島川東岸の荒平山 山麓緩斜面に弥生時代中期後半～後期前半の円形、方形の堅穴式住居跡9棟、掘立柱建物1棟が検出されたという。未報告。

(註5) 滝石哲也、長家伸、榎本義嗣1992「入部Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集

(註6) 註1と同じ

### 3、岩本遺跡の縄文時代資料について

第4面において縄文時代の遺物が出土した。遺物は旧河道である谷部の黒色の腐植土層中に分布しており、包含層を形成していた。分布状態からは北側の微高地3から流れ込んだ状態が推定され、集落の縁辺に形成された廃棄物の集積であると見られた。遺物量は調査範囲も狭く多くはない。以下では出土した土器と石器について若干の検討を加えたい。

#### 1、出土土器の編年的位置づけ

出土した土器は小破片のため識別の困難なものが多いが、器種は浅鉢形が6形式、深鉢形が5形式それに高杯と見られるものが1個体ある。このうち深鉢形は4形式が粗製土器であり、精製土器は極めて少ない。

浅鉢A類と高杯は四線文と横円形四点文を特徴とし、宮内克己氏のいう三万田Ⅲ式浅鉢

E類に類似する。しかし、浅鉢B類やC、D類は口縁部に沈線が1条施されているものが多く、口縁端部が角張る特徴をもつものが認められる。こうした点から第4面の土器群は後期後葉の三万田Ⅲ式の段階と、晩期前葉新段階の古閑式に対応する時期に位置付けられるものと考えたい。

出土土器のうち古閑式に相当するものの器種構成は表4に示した。深鉢には二時期の混在が予測され、口縁部のみを使用しかつ数量が少ないとから、主体を占める晩期の当該集団の保有する器種構成を正しく示しているとは思えないが、ある程度反映していると考えよかろう。

精製土器と粗製土器の割合はおよそ1:2である。比較的精製土器が多い結果となる。ただし、これも資料数のための誤差かも知れない。

また、表を見ると精製土器の中での構成は浅鉢が9割弱、主体を占めている。宮内克己氏によると浅鉢の比率は、四箇A地点の三万田Ⅰ式では24.6%、四箇東遺跡の三万田Ⅱ式では72.2%、三万田Ⅲ式になると89.6%と、しだいに増加している。本遺跡における構成比率は三万田Ⅲ式に近似している。こうしたことから粗製の系統としても連続性を認めることができよう。ただし、同時期と見られる熊本県御領貝塚の器種や土器組成と比較すると、精製土器と粗製土器の割合や、精製土器の組成に差異がある。これは両者に若干の時期差や地域差も考慮する必要があると考えられる。

なお、深鉢には丁寧なナデで仕上げられ、半精製土器と呼ばれるものを含むが、器形全体の調整が不明なため、ここではあえて取り上げない。

以上の点から本遺跡第4面出土の土器は縄文時代晩期前葉の、いわゆる古閑式に並行する土器型式を主体とし、少量の三万田Ⅲ式を含むものであると考えられる。しかし、厳密には中部九州の御領式とは器種や組成などに差異が予測されるため、この型式名を用いることは好ましくない。北部九州において晩期前葉の土器型式は広田式以外の資料の集積が少なく明確でない。近年、脇山A遺跡などの調査によって明らかとなりつつあるが、なお土器型式の研究が不十分である。とはいって、本遺跡の土器類も該期の標識として型式設定するにはあまりに内容が少ない。今後、当該時期の良好な資料の集積を待ち、型式設定や内容の検討がなされるべきであろう。

| 器種 | 形式 | 点数 | 形式割% | 器種別% |
|----|----|----|------|------|
| 浅鉢 | B  | 2  | 3    |      |
|    | C  | 2  | 3    |      |
|    | D  | 7  | 11   | 29   |
|    | E  | 6  | 10   |      |
| 深鉢 | F  | 1  | 2    |      |
|    | A  | 2  | 3    |      |
|    | B  | 2  | 3    |      |
|    | C  | 6  | 10   | 71   |
|    | D  | 9  | 15   |      |
| 計  | E  | 24 | 40   |      |
|    |    | 61 | 100  | 100  |

表4. 第4面出土土器構成

## 〔註〕

- (註1) 齋内克己1981「三万石式土器の研究」『古文化調査』8号 (pp251-270)  
 (註2) 坪井清足1967「熊本県御領貝塚」「石器時代」8号  
 (註3) 小池史哲1980「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会  
 (註4) 山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」「縄文文化の研究」4号 (pp249-261)  
 (註5) 池田祐司1992「脇山IV」福岡市教育委員会

## 2. 共伴石器について

## (1) 剥片石器

剥片石器類は表5に示したように112点出土した。定形石器は12点であり、他は石核2点、剥片41点、碎片56点、原石1点である。剥片石器としては石鎌3点、尖頭器1点、削器1点、石錐1点、加工のある剥片3点、使用痕ある剥片3点の12点がある。こうした組成は北部九州の縄文時代後期後半～晚期前葉の一般的なあり方である。このなかでも剥片錐や加工のある剥片に含めた縦長剥片の両側に調整を持つ石器はこの時期の特徴的石器である。なお、後者はサイドブレードや刃器として報告される場合が多い。

石材は黒曜石106点、古銅輝石安山岩6点である。黒曜石の産地は科学分析を実施していないので明らかではないが、肉眼的には佐賀県伊万里市腰岳に産するものに類似する。古銅輝石安山岩も産地は不明であるが、石器が多いのに対して石核や碎片ではなく、剥片も極めて少ないことが注意される。またその剥片も比較的大きいものであった。こうしたことからみて本遺跡において出土した古銅輝石安山岩は、本遺跡内において剝離、生産されたものとは考え難く、他から搬入されたものと考えられる。黒曜石は石器8点、剥片・碎片98点、石核・原石3点からなる。原石は2×3cm大の角礫である。石核は2点ある。1点は不定形な剥片を剝離するものである。もう1点は楔形石器とも呼ばれるも

| 石材          | 石器 |    |    |     |     |    |    | 計  |      |     |
|-------------|----|----|----|-----|-----|----|----|----|------|-----|
|             | 石鎌 | 削器 | 石錐 | 尖頭器 | 使用痕 | 剥片 | 碎片 |    |      |     |
| 黒曜石         | 3  | —  | 1  | —   | 1   | 3  | 39 | 56 | 2(1) | 106 |
| 古銅輝石<br>安山岩 | —  | 1  | —  | 1   | 2   | —  | 2  | —  | —    | 6   |
| 計           | 3  | 1  | 1  | 1   | 3   | 3  | 41 | 56 | 2(1) | 112 |

表5. 第4面出土剥片石器一覧（石核の（ ）は原石を示す）

| 形態 | 打面 | 分類 |    | 計  |
|----|----|----|----|----|
|    |    | 剥片 | 碎片 |    |
| 縦長 | 自然 | 3  | 4  | 7  |
|    | 調整 | 7  | 4  | 11 |
|    | 線状 | 5  | 6  | 11 |
|    | 不明 | 5  | 9  | 14 |
| 横長 | 自然 | 4  | —  | 4  |
|    | 調整 | 4  | 1  | 5  |
|    | 線状 | —  | 1  | 1  |
|    | 不明 | —  | —  | —  |
| 不定 | 自然 | 5  | 2  | 7  |
|    | 調整 | 3  | 6  | 9  |
|    | 線状 | 1  | 7  | 8  |
|    | 不明 | 2  | 16 | 18 |
|    |    | 計  | 39 | 56 |
|    |    |    |    | 95 |

表6. 剥片・碎片の形態、打面調整分類表

のであり、剥片石器の1つとみる説もある。ここでは本遺跡の縦長剥片の剥離技術理解のために、表6に本遺跡出土の剥片、碎片について形態と打面を観察し、分類してみた。

表では縦長剥片は縦横比が1.5:1以上上のものを仮に縦長剥片とし、同様に縦横比が1:1.5以上のものを横長剥片とした。不定形剥片はそれ以外のものや、目的剥片以外の調整剥片を含めた。また、調整打面には平坦打面や自然面が一部に残るものも含めている。線状打面は剥片の形態として、打面部が面的構成をなさず上面観が線状になっているものを取り上げた。こうした定義のために、若干の分類の曖昧さを残すが、おおまかには本石器群の剥片や碎片の特徴を知ることができよう。

表を見ると剥片では横長や不定形剥片に自然打面が多い。これは石核形成や調整初期の剥片を多く含んでいるためである。また、碎片の多くは打面や作業面の調整時に剥出されたものである。

剥片の形態は縦長剥片が過半数を越え、不定形剥片が次ぎに多い。横長剥片は僅かである。この傾向は碎片でも同様に把握することができる。こうしてみると本遺跡において主体をなす剥離技術は縦長を基調としていたと考えられる。この縦長剥片の剥離技術がいかなるものであったかは、出土した石核や剥片数が僅かなために明確ではない。出土した石器、剥片を見ると端正な縦長剥片を生産する打面向設、一部に打面単設の剥離技術が予測される。しかし、詳細にみると背面の剥離面が不整形であり、連続的な剥片剥離をなしているものは少ない。また打面の調整、形状も多様である。打角は観察できるものが少ないが、80度前後のものが多い。こうした点から見ると主要な剥片剥離技術として「鉛桶型刃器技法（以下“鉛桶型”とする）」は認め難く、むしろ山口譲治氏の提唱する「類鉛桶型刃器技法（以下“類鉛桶型”とする）」の存在が推定される。しかし、本遺跡の剥片剥離技術を構成するのはこの剥離技術だけではない。出土した1点の石核は縦長を意識しているものの不定形剥片を剥離したものである。また90°の打面転移があり、初期の打角が60度前後と急角であり、入念な打面調整を施している。打面の設定にはいわゆる“鉛桶型”的影響を見ることが可能だが、技術的には共通項を認め難いものである。類似した技術は本遺跡と同時期の田村遺跡第3地点S-X31出土石器群の検討の中で認められる。小畠弘己氏はその技術的特徴を以下の3つにまとめている。<sup>(註4)</sup> ①素材に径3~5cmの大の角礫が用いられる。<sup>(註5)</sup> ②打面移転が頻繁に行われる。<sup>(註6)</sup> ③打面調整は認められない。このうち本遺跡の資料とは①と②が一致するものの、③において差異がある。また、こうした技術に類似するものとして、橋昌信氏が西区石丸・古川遺跡の繩文晩期後葉の剥片剥離技術を検討して設けた「十郎川型剥片剥離技術（以下“十郎川型”とする）」がある。これらが共通の技術として把握され、先の差異をその中の変異として見るのか、あるいはそれらが独自の剥離技術であり技術的な推移を認めるのかは再度入念な資料の検討を踏まえて結論を出したい。

さてこれらの二つの剥片剥離技術の他に楔形石器を用いた剥離技術が予測される。剥片の中

にみられる線状打面をもつものが2割強認められた。また、加工ある剥片の中にも線状打面をもつものがある。線状打面をもつ剥片は主要剥離面が比較的平坦であり、これを目的としている可能性がある。また、この剥離面は楔形石器の剥離面と特徴が一致している。こうした剥片剥離には作業台の使用が予測され、剥離には偶然的因素が加わり易い。北部九州では“鈴桶型”<sup>（鈴型）</sup>が出現する縄文時代後期中葉から多く認められ、弥生時代前期まで存続するようである。縦長剥片を意識する点では“鈴桶型”や“類鈴桶型”と共に通しており、この時期に増加することも理解できる。あるいはこれらの石核の一部が剥片剥離の進行の過程に、こうした楔形石器に移行する場合も考えられよう。

以上のように本遺跡の剥片石器群は黒曜石を素材とする3つの剥片剥離技術が認められた。それはひとつは“類鈴桶型”であり、つぎに“十郎川型”に類似する技術があり、さらに楔形石器を用いた剥離技術がある。これらの技術により剥離された剥片を使用し、各種の石器が製作されている。なお、古銅輝石安山岩を素材とする石器類は遺跡内での剥片剥離は行われず、全て搬入されたものと考えた。

以上の剥片石器群は土器群の検討から晚期前葉を主体としながらも二時期に区分される可能性がある。1つは後期後葉の三万田皿式の時期であり、おそらく“類鈴桶型”を主体とするもの。もう1つは晚期前葉の古闕式の時期であり、“十郎川型”を主体とするものと考えられる。

## （2）礫石器

礫石器としたものは偏平打製石斧12点とその破片4点であった。石斧は剥片素材のものが多く、厳密な意味での礫石器ではない。また、その時期は晚期前葉を主体としている見られるが、後期後葉のものを少量含んでいる可能性がある。

完形品は3点だけであり、他は基部、先端部の欠損品、もしくは碎片である。多くは使用後の廃棄とみられ、この種石器の消耗度の激しさを伺わせる。同時に出土した碎片も破損時のものが多く、遺跡内での石斧の生産は行われていない可能性が強い。

本遺跡出土のものは全体の形態、法量がわかるものが少なく、それらの検討はここでは省きたい。

石材は全て玄武岩を素材とするものであるが、分析を経ていないために厳密な产地については不明である。自然面や破損部の肉眼観察では市内西区今山産出の石材に類似する。ちなみに本遺跡と今山の直線距離は約10kmである。

表7では本遺跡の所在する早良平野の縄文時代後期から晩期の偏平打製石斧の石材を分類した。時期の判定できる良好な資料が少なく、報告書によっては石材の区分が不明瞭なものがあった。表作成に当たっては、確実なものを提示した。なお、「その他」には石材が不明なものを含んでいる。また、柏田遺跡は福岡平野に所在するが、周辺では最古の例であるために参考として取り上げた。

縄文時代後期中葉の例として春日市柏田遺跡がある。ここでは20点のうち大半の16点が変成岩であり、玄武岩は1点のみであった。変成岩は福岡平野東部に産出するものである。こうしたあり方は後の早良平野とは著しく異なる。次に四箇遺跡A地点、J10i、L11c地区は縄文時代後期後葉に位置付けられるものである。全体に類似した石材の組成を見せる。主体をなすのは玄武岩であり、全体の8割強を占める。

| 石材     | 変成岩 | 玄武岩 | 凝灰岩 | その他 | 計   |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 柏田遺跡   | 16  | 1   | —   | 3   | 20  |
| 四箇A地点  | —   | 51  | 3   | 3   | 57  |
| 四箇J10i | —   | 2   | 1   | 1   | 4   |
| 四箇L11c | —   | 10  | 2   | —   | 12  |
| 田村3地点  | 4   | 6   | —   | 6   | 16  |
| 田村4地点  | 1   | 2   | —   | —   | 3   |
| 田村5地点  | —   | 3   | —   | 1   | 4   |
| 田村10地点 | —   | 5   | 1   | —   | 6   |
| 計      | 21  | 80  | 7   | 14  | 122 |

(表8) 表7. 早良平野を中心とした偏平打製石斧の石材分類表

他の石材としては凝灰岩が1割以下であるが使用されている。田村遺跡第3地点は縄文時代後期末葉から晩期前葉に位置付けられる。ここでは玄武岩が最多石材ではあるが、4割程度となっている。注意されるのは変成岩が多く認められることである。第4、5、10地点は晩期中葉から後葉に位置付けられるものであるが、玄武岩は全体で8割弱であり、後期後葉に近い比率となっている。以上のように早良平野では偏平打製石斧の石材として各時期を通じて玄武岩が主要石材として多用される状況が認められる。本遺跡の石材は全て玄武岩であり、この地域的一般的特徴を示すとみて良い。しかし、ほぼ同時期とみられる田村遺跡第3地点は変成岩が多く、異なる内容となっている。変成岩は福岡平野の柏田遺跡に多く認められる。福岡平野では柏田遺跡以後の後続する時期の石材組成が不明であるが、偏平打製石器の石材は平野ごとに異なるものを使用していた可能性がある。そうであるなら田村遺跡第3地点の石材に見られる様相は、早良平野以外の、おそらく福岡平野との何らかの関係の結果であるとみられる。

こうした偏平打製石斧の石材の地域内の様相については、東九州の大野川流域で検討している。この地域では縄文時代後期後半にはほとんど遺跡ごとに各種の石材が使用されている。晩期前半にも依然として各種の石材が使用されているが、ある種の石材は遠隔地であるにも拘らず広域に認められ、その使用頻度も一部には高まる状況が認められた。

また、早良平野ではこの種石器の製作に伴う剥片、碎片は遺跡内では出土していない。おそらく石材産出地でまとめて製作が行われ、各集落に搬入されたものであろう。同様のあり方は熊本県二子山遺跡でも推定されており、大分県大野川流域でも類似した状況を推定した。こうした石器製作の手順は偏平打製石斧生産の一般的特徴と見ることができよう。しかし、これらが各集落ごとに自給的に行われたものか、ある種の集団間交渉を伴うものかは現時点では判断し難い。先の大野川流域では後期後半に集落ごとの自給であったものが、晩期前半になると一

部に他集団との交渉を予測するものが認められるようになる。北部九州では平野ごとに初期から単一石材への傾向が強く、大野川流域とは異なっている可能性がある。こうした点については遺跡ごと、平野ごとの偏平打製石斧の形態、法量の比較、検討を行うことで、追求が可能かと思われる。今後の課題としたい。

(註)

- (註1) 梗形石器についてはその用途についてさまざまな説が出されている。西日本だけでも春成秀爾、渡辺和子氏らの見解がある。  
春成秀爾1990「弥生時代の始まり」東京大学出版会  
渡辺和子1978「まとめ、梗形石器」『四箇周辺遺跡調査報告書』福岡市教育委員会 (pp106-107)  
(註2) 杉原莊介・戸沢充則・横田義寧1966「北九州における特殊な刃器技法—佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群—」『考古学雑誌』51-3  
(註3) 山口謙治1984「石器・小結」「福岡市早良区田村遺跡II」福岡市教育委員会 (pp28-32)  
(註4) 小畠弘己1987「第3地点の調査、甕文包含層、石器」「田村遺跡III」福岡市教育委員会  
(註5) 小畠弘己氏は平坦打面や複数の剥離面で形成された打面についても、剥片剥離に伴わないものは打面調整と認めていないようである。これは著者の認識とは異なっている。本報告では剥片剥離工程を重視する意図からこれらを打面調整とした。  
(註6) 橋昌信1984「縄文時代晚期の石器—西北九州における石器研究ー」『史学論叢』15号  
吉岡完祐ほか1982「十郎川(二)」福岡市早良平野石丸・吉川遺跡「住宅・都市整備公園  
(註7) 北部九州では縄文時代後期の柏田遺跡、四箇遺跡A地点、四箇東遺跡、田村遺跡や弥生時代前期の比恵遺跡群などに出土例がある。  
(註8) 表作成に用いた報告書は以下のとおりである。  
小池史吾1977「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集 福岡県教育委員会  
柳田純孝編1978「四箇周辺遺跡調査報告書(2)」福岡市教育委員会  
二宮忠司・渡辺和子1983「四箇周辺遺跡調査報告書(5)」福岡市教育委員会  
二宮忠司1987「四箇道路」福岡市教育委員会  
濱石哲也1987「田村遺跡III」福岡市教育委員会  
二宮忠司・濱石哲也・佐藤一郎1989「田村遺跡IV」福岡市教育委員会  
なお田村遺跡第3地点出土石斧の石材のうち片岩、片麻岩は大区分として变成岩にくくめた。  
(註9) 吉留秀敏1983「先土器時代・縄文時代の石器」「楠野」大分県教育委員会  
(註10) 三島裕ほか1971「二子山石器製作所址調査報告書」西合志町教育委員会  
(註11) 註9とおなじ

## 岩本遺跡

—岩本遺跡群第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集

1991年3月13日

発行：福岡市教育委員会 福岡市中央区大神一丁目8-1

印刷：慶和印刷株式会社 福岡市博多区東郷町一丁目15-1